

矢倉遺跡

筑紫野市大字筑紫所在遺跡の調査

筑紫野市文化財調査報告書

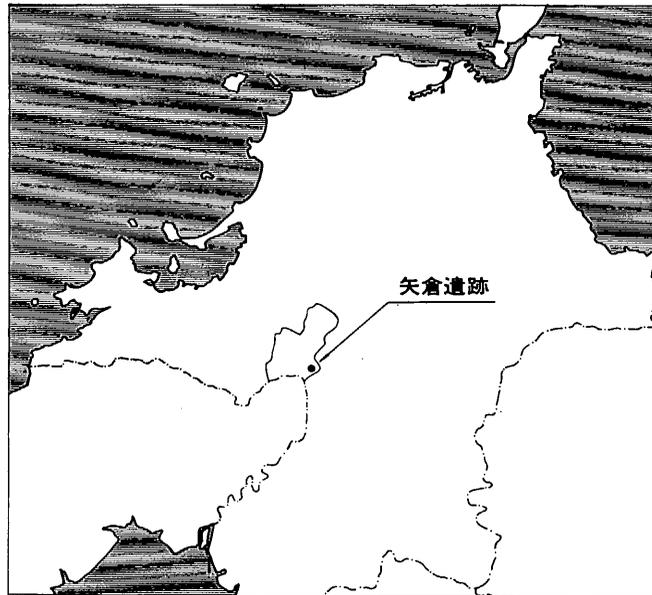
第 8 集

1982

筑紫野市教育委員会

矢倉遺跡

筑紫野市大字筑紫所在遺跡の調査



序

筑紫野市は、昭和47年4月市制施行以来、福岡都市圏のベッドタウンとして人口急増地となっています。この矢倉遺跡も例外ではなく、昭和48年に民間業者により宅地造成の計画がなされ、約2年間文化財の保護保存について、協議を行ってまいりましたが、結局、文化財を破壊するということになりました。市の体制不備から完全な調査は出来ず、また、調査後次々と開発がなされ、6年を経た現在になって本報告書を作成するはこびとなりました。この調査に携わって下さいました多くの人々にお詫びする次第です。

なお、この報告書が少なくとも我々は勿論、市民一人一人の文化財愛護・郷土の歴史教育の資料として永く活用されることを願っております。

最後に、調査・整理に協力していただきました、株式会社筑紫土木、福岡県教育委員会文化課、市内文化財諸関係者の方々にお礼申し上げます。

昭和57年3月31日

筑紫野市教育委員会

教育長 松田康男

例 言

1. 本書は筑紫野市大字筑紫 461 番地に所在した遺跡の発掘調査報告書である。
2. 遺跡名については、福岡県遺跡分布地図に筑紫氏居館跡となっているが、調査地がその一部分であることから、当時小字名をとり矢倉遺跡としていたために、この調査地については矢倉遺跡としてあつかう。
3. 調査は昭和50年度、株式会社筑紫土木の委託金と市費とにより、筑紫野市教育委員会が福岡県教育委員会文化課の応援を受けて実施した。
4. 遺物整理は昭和50・56年度に分けて行った。
5. 現場における実測は佐々木隆彦（県文化課技師）、山野洋一が主にあった。
6. 遺構、遺物の実測・製図は山野・奥村俊久が行った。また、磁器の実測については福岡県教育委員会文化課技師故前川威洋氏にお願いした。
7. 全ての写真撮影は山野が行った。
8. 本書の執筆は山野がⅠ・Ⅱ・Ⅲ 1・2（4～6）、4(1)5(1～2)を奥村がその他を担当し、Ⅳについては山野、奥村が協議してあたった。
9. 本書の編集は山野があたり奥村が協力した。

本文目次

	頁
I 調査にいたる経過	1
II 位置と環境	2
III 調査の内容	4
1 調査概要	4
2 弥生時代の遺構と遺物	4
(1) 住居跡	4
(2) 貯蔵穴	8
(3) 井戸	9
(4) 木棺墓・土墳墓	11
(5) 甕棺墓	15
(6) 溝	18
3 古墳時代の遺構と遺物	21
(1) 住居跡	21
4 歴史時代の遺構と遺物	23
(1) 土墳	23
5 その他の遺構と遺物	24
(1) 不明土墳	24
(2) ピット出土の土器	24
(3) 表採資料	26
IV まとめ	29
(1) 時期について	29
(2) 筑紫氏との関係について	29

図 版 目 次

本文対照頁

図版 1—(1)	遺跡の遠景（北より）……………	2
	(2) 遺跡の近景（北より）……………	2
図版 2—(1)	A地区全景（南より）……………	4
	(2) B地区全景（東より）……………	4
図版 3—(1)	C地区全景（東より）……………	4
	(2) 発掘調査風景（南より）……………	4
図版 4—(1)	1号住居跡（南より）……………	4
	(2) 2号住居跡（南東より）……………	21
図版 5	1号住居跡出土遺物……………	4
図版 6	2号住居跡出土遺物……………	21
図版 7—(1)	貯蔵穴（北より）……………	8
	(2) 貯蔵穴出土遺物……………	8
図版 8—(1)	井戸……………	9
	(2) 井戸出土遺物……………	9
図版 9—1	1号甕棺墓……………	15
	2 2号甕棺墓……………	15
	3 3号甕棺墓……………	15
図版10	矢倉遺跡出土甕棺……………	15
図版11—1	1号木棺墓……………	11
	2 2号木棺墓……………	11
	3 3号木棺墓……………	11
	4 4号木棺墓……………	11
図版12—(1)	溝 1（左側） 溝 2（右側）……………	18
	(2) 溝出土遺物（溝 1…………… 4 溝 2…………… 1・2, 3は表採品）……………	20
図版13	溝及び表採遺物（溝 1…………… 1～4, 表採品…………… 5～15）……………	20・26
図版14—(1)	1号土壙……………	23
	(2) 1号土壙出土遺物……………	23
図版15	2号土壙及び2号木棺墓出土遺物……………	11・24

挿 図 目 次

	頁
第1図 矢倉遺跡位置図	3
第2図 矢倉遺跡遺構配置図	折り込み
第3図 1号住居跡実測図	5
第4図 1号住居跡出土土器実測図	6
第5図 1号住居跡出土土器実測図	7
第6図 1号住居跡出土鉄器実測図	8
第7図 貯蔵穴実測図	8
第8図 貯蔵穴出土土器実測図	9
第9図 井戸実測図	10
第10図 井戸出土土器実測図	10
第11図 1・3号木棺墓実測図	12
第12図 2・4号木棺墓実測図	13
第13図 5・6・7号木棺墓・土壙墓実測図	14
第14図 2号木棺墓出土土器実測図	14
第15図 2号木棺墓出土石器実測図	15
第16図 1・2号甕棺墓実測図	16
第17図 3号甕棺墓実測図	17
第18図 1・2号甕棺実測図	17
第19図 3号甕棺実測図	18
第20図 溝1・溝2実測図	19
第21図 溝出土土器実測図	20
第22図 溝出土石器実測図	20
第23図 2号住居跡実測図	21
第24図 2号住居跡出土土器実測図	22
第25図 2号住居跡出土石器実測図	22
第26図 1号土壙実測図	23
第27図 1号土壙出土磁器実測図	23
第28図 2・3・4・5号土壙実測図	25
第29図 2号土壙出土土器実測図	26

第30図	ピット出土土器実測図	26
第31図	表土出土土器実測図	27
第32図	表土出土紡錘車・石器実測図	28

I 調査にいたる経過

筑紫野市筑紫地区における開発は、昭和40年代後半において活発となり、特に国道3号線・同200号線それに西鉄大牟田線という交通の要所にあり、この矢倉遺跡もその対象となるのも時間の問題であった。

昭和48年5月29日、株式会社筑紫土木より一般宅地造成の開発行為申請が、本市都市計画課へ提出された。その事を察知した市教育委員会は事前審査会の席上、この申請地が本市文化財分布地図掲載101号に該当し、遺物の散布地となっていることから遺跡の保護・保存のために開発の中止を要請したが、話し合いは物分かれとなった。

その後、昭和49年11月16日に同申請地の開発に関する変更申請が行なわれた。その後も申請者と遺跡の保護・保存について再三に亘り、協議を行なった。

その結果、試掘を行うことにより、遺跡の確実性を立証することになり、昭和50年6月12日現地において福岡県教育庁管理部文化課・市教育委員会・申請者の三者により試掘を実施し、弥生時代の住居跡等を発見した。後日、三者による協議を行い、申請者の株式会社筑紫土木が発掘調査にかかる経費を負担（総額150万円）し、県教育委員会より技術職員の派遣を受け市教育委員会が調査主体者となり、昭和50年6月16日より同年7月31日までを一応の調査期間として実施することになった。

しかし、申請者は調査中も工事を中止することなく結果として、調査区をA・B・C各地区に分断されることになった。

なお、追記すると正式の開発許可は昭和50年7月24日であった。このことは文化財調査に対する開発側の認識不足と協力のなさ、また、言い換えれば、文化財保護行政の体制の貧弱さを裏付けていて財政的・法制度的なもろさを浮き彫りにしているとも言える。

なお、調査は昭和50年6月16日より同年7月24日をもって現場調査を完了し、遺物整理は現場調査終了後行なったが、予算切れに伴ない、途中で未完のまま収蔵庫を転々とする事となった。

昭和56年度市費予算計上により、今回本報告のはこびとなった。この調査に携わった人を以下に連記すると次の通りである。

調査依頼者 株式会社筑紫土木 取締役社長 山本 徳

調査受託者

総括（調査責任者）

筑紫野市教育委員会 教育長 二宮 親卯

筑紫野市教育委員会 社会教育課 課長 松浦 敏春

庶務

筑紫野市教育委員会 社会教育係 係長 竹田 征治

” ” 主事 山野 洋一

発掘調査

福岡県教育庁管理部 文化課 技師 佐々木隆彦

” ” ” 新原 正典

筑紫野市教育委員会 社会教育係 主事 山野 洋一（調査主任）

” ” 成富 清治

調査補助員

佐藤保雄・別府文明・三津井和幸・八尋実

現場作業員

岡部 徳・三木勝一・下川琢磨・梶原恒雄・安西関・黒瀬トシオ・田籠誠一・柴田高義・須藤貴史・安西貞子・柴田芳子・岡部キクヨ・柴田ハルエ・永吉キヨ・福田サキエ・山下ハルカ・白木イツエ・安西富代・山内弘子・永吉貞子

室内整理事業員

昭和50年度 佐藤保雄・三津井和幸・林恵子・奥村俊久・田籠誠一・砥上秀晃

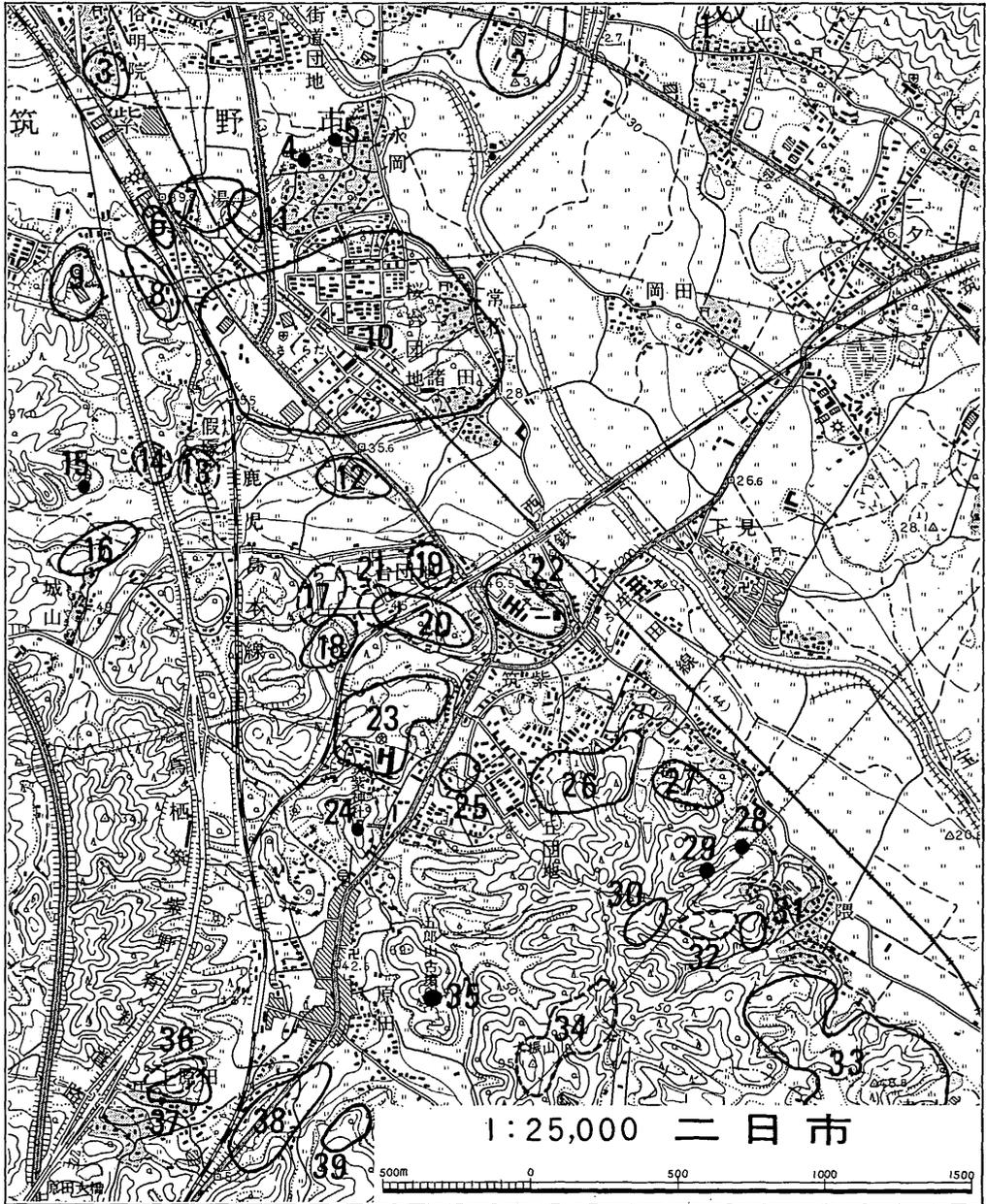
昭和56年度 村上喜代・井上惇子・小西恵子・本山三葉子

以上、多数の方々の協力により調査することができました。また、調査地が市立筑紫小学校の隣接地であったため、校長先生をはじめ用務員の方々に色々とお迷惑をおかけしました。ここに記してお礼申し上げます。

Ⅱ 位置と環境

筑紫野市は西に背振山塊、北東には三郡山塊が迫り、その間に狭長な筑紫野の平野がある。平野は北西に福岡平野を南に筑後平野に続いている。また、北西には驚田川があり、御笠川と合流し博多湾へ、東には筑後川と合流して有明海に注ぐ宝満川がある。宝満川は三郡山を源にその山麓を回り込むように流れ、吉木・阿志岐の平野を潤し、永岡付近で権現山に源を発する山口川と合流し、分水嶺となり、周辺部は広範囲に渡って肥沃な平野を形成している。

そこには各山塊より派生した丘陵が発達し旧石器時代から歴史時代に及ぶ各時代の遺跡が群集している。弥生時代の墓地として150基以上の甕棺を出土した永岡遺跡⑩（註1）や弥生時代集落地と墓地とが共存した常松遺跡⑩（註2）や多くの散布地がある。古墳時代には、装飾古墳として有名な国指定五郎山古墳⑩など、多くの古墳群も点在している。そのほぼ中央部に矢倉遺跡⑩はあり、宝満川西岸の、比高20m程の丘陵上にあり、弥生～歴史時代に生活を十分に満たす条件をかねそなえている。



第1図 矢倉遺跡位置図

- ③浴明院跡 ④銭塚古墳 ⑤鳥井元古墳 ⑦竹敷町遺跡 ⑧大牟田東遺跡 ⑨大牟田西遺跡 ⑩常松遺跡
 ⑪永岡遺跡 ⑫木山遺跡 ⑬仮塚古墳群 ⑭大牟田古墳群 ⑰薬水古墳群 ⑱名越古墳群 ⑳筑紫倉吉遺跡
 ㉑兄弟塚古墳群 ㉒矢倉遺跡 ㉓筑紫神社 ㉔前畑遺跡 ㉕天神社裏山遺跡 ㉖隈古墳 ㉗上屋敷古墳
 ㉘柳野古墳群 ㉙隈遺跡 ㉚大振山古墳群 ㉛五郎丸古墳 ㉜上原田古墳群 ㉝上原田遺跡 ㉞野口遺跡
 ㉟不別当遺跡

※①・②・⑥・⑮・⑯・⑳・㉑・㉒・㉓・㉔・㉕・㉖・㉗・㉘・㉙・㉚・㉛・㉜・㉝・㉞・㉟は散布地。

註1 福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第4集 1976 第5集 1977 福岡県教育委員会・永岡遺跡 筑紫野市文化財調査報告書 第6集 1581 筑紫野市教育委員会

註2 福岡県筑紫郡筑紫野町常松遺跡報告書 1970 別府大学文学部考古学研究室報告書1

Ⅲ 調査の内容

1. 調査概要 (第2図 図版2・3)

調査は宅造業者の先行により、開発予定地の南部分に集中せざるおえず、その調査地もブルドーザーにより3地区に区分された。調査時は一応、東側部分をA地区(図版-2(1))、西側部分をB地区(図版-2(2))、A・B両地区に狭まれた北側部をC地区(図版-3(1))として調査を実施した。以下、各地区の遺構を列記して概要にかえる。

A地区 弥生時代の甕棺墓3基、木棺墓4基、土壙3基、古墳時代の竪穴住居跡1軒、その他多数のピットが検出された。特に木棺墓は小ぶりながらも1列に並んでいる。

B地区 弥生時代の溝2条、貯蔵穴1基、木棺墓1基と土壙が8基以上確認した。また、ピットを多数検出したもののまとまるものはなかった。

C地区 弥生時代の竪穴住居跡1軒、井戸1基検出され、中世の土壙1基、その他時期不明の土壙4基とピットを検出した。また、中世の土壙からは、完形の白磁碗が2個体出土している。調査は3地区に分断されたために、遺跡の全体像が十分把握できえないまま終わった。

2. 弥生時代の遺構と遺物

(1) 住居跡

1号住居跡 (第3図 図版4(1))

調査区の北端で検出した長方形プランをもつ住居跡である。東側はすでに破壊され、約 $\frac{1}{2}$ のプランを確認するにとどまった。規模は南北3.5mを測り、東西は残存5.7mを大きく超えないものと思われる。壁は南側で20cm、北側で10cmほどを残す。柱穴はプラン内だけで15を数えるが、主柱は住居跡の全容を知り得ない以上明確にしない。しかし東西中心軸よりやや南に径50cm程度の柱穴が東西にあり、これが柱穴の可能性もある。

住居跡中央部には甕や器台の破片が散乱し、その西～南側に高坏、東側に壺が認められたが、器台3個体と浅鉢1個体が、ほぼ完形に復元しえるほか、いずれも部分的な破片であった。また、出土したすべての高坏と、甕・壺の各1個体に丹が塗られている。これらの遺物は床面のほぼ直上で認められたものであり、この住居が使用されなくなってもなく廃棄されたものと思われる。また住居跡や中央部から鉈が床面よりやや浮いて出土した。

遺物 (第4・5図 図版5)

1～7は逆L字状を呈す甕の口縁部である。1は口径35cmを測り、口縁内側は僅かに張り出す。口縁上面は平坦を保つが、端部は少し下がる。胴部の大半を欠失するが、胴部上位にふくらみをもつものと思われる。2は口径33.6cmを測り、口縁内側は僅かな張り出しと稜をもつ。口縁上面は若干の丸味をもって下り、端部に刻み目を施す。3は口径31.8cmを測り、口



第2図 矢倉遺跡遺構配置図 (縮尺1/200)

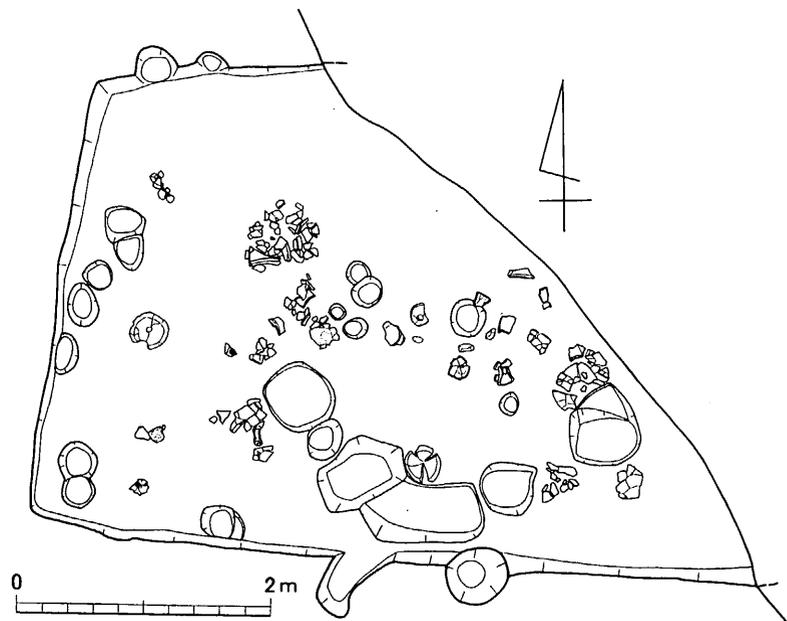
縁内側は僅かな張り出しをもつ。口縁上面は平坦で、胴部はふくらみをもたずに下る。4は口径17.2cmを測る。口縁上面は平坦で、端部は少し下がる。胴部はややふくらむものと推定され、器面には丹が塗られる。5は口径26cmを測り、口縁内側は僅かに張り出しをもつ。口縁上面は水平で、胴部はややふくらみをもつものと推定される。7は口径26.4cmを測り、口径のわりに器高が低い。口縁内側は僅かに張り出し、上面は平坦を保つ。8～13は甕の底部で径7.3～8.2cmを測り、9～12は僅かに上げ底を呈す。14～18は壺または鉢の底部であり、底径は17を徐き7.2～9cmを測る。また16の外側と17の内面には刷毛目が認められる。

19～22は器台であり、脚部径に比べ受部径がやや小さい。体部は緩やかなカーブを描く円筒状を呈す。19は器高15.5cm受部径10.6cm、脚部径12.8cm。20は器高15.5cm受部径9.8cm脚部径12.6cm。21は器高11.1cm受部径10cm脚部径11.4cm。22は脚部径14cmを測る。調整は磨滅や表面剥落のため不明瞭であるが、外面は縦方向、内面脚部は横方向の刷毛目が観察される。

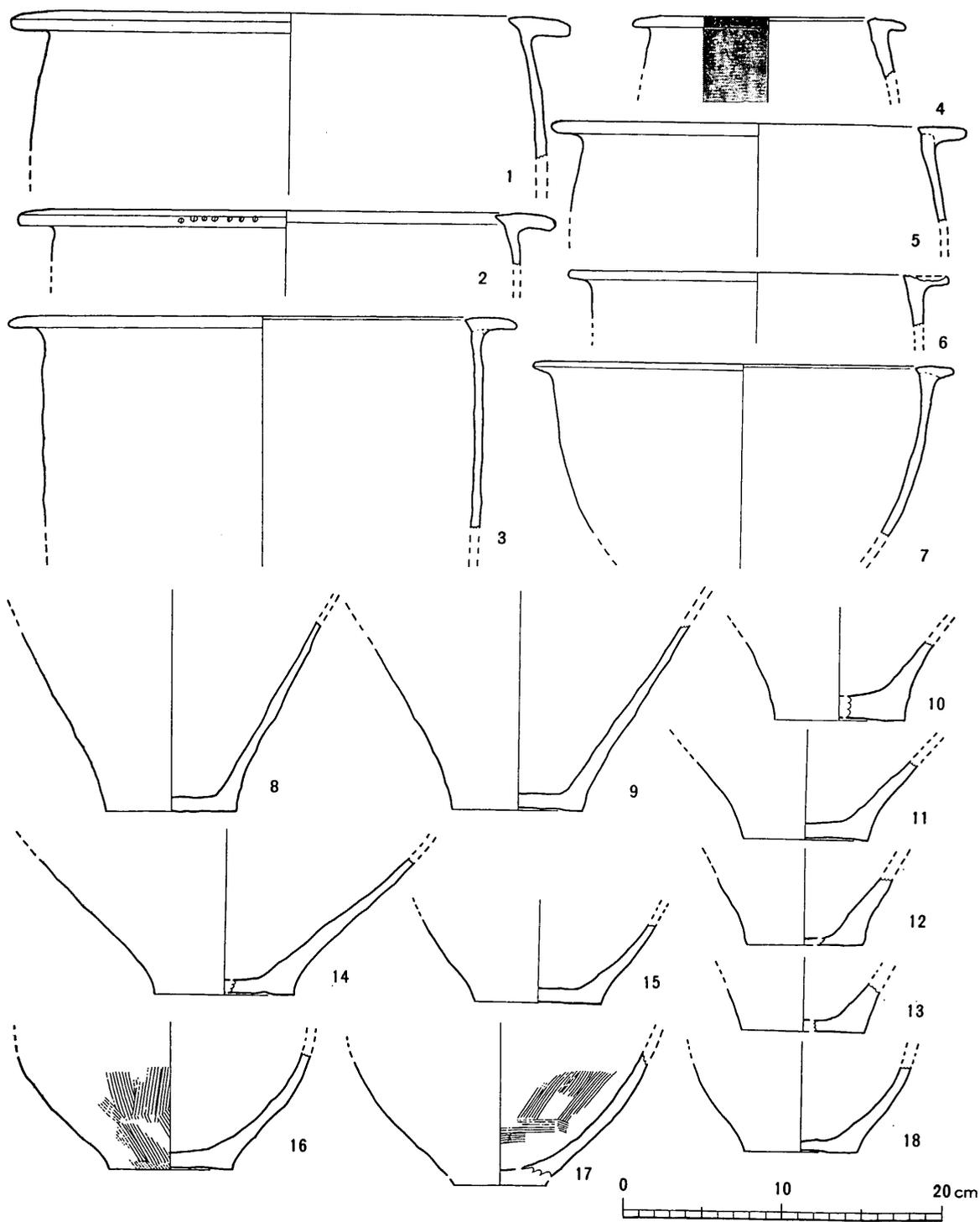
23は鉢で、器高9cm口径16cm底径5.5cmを測る。内湾気味の口縁部から、直線的に底部に至る。器面は磨滅が著しい。

24～27は高坏で、いずれも丹が塗られる。口縁部は鋤先状を呈し、外側にやや傾斜する。25の口縁下には三角凸帯を一条めぐらす、脚部の内面にシボリ痕が残る。24は脚部下半を欠失するもので口径25.8cmを測る。25・26は脚部を欠失し、それぞれ31.8cm、26.8cmを測る。27は脚部下半だけ残り、脚端部で径16.2cmを測る。

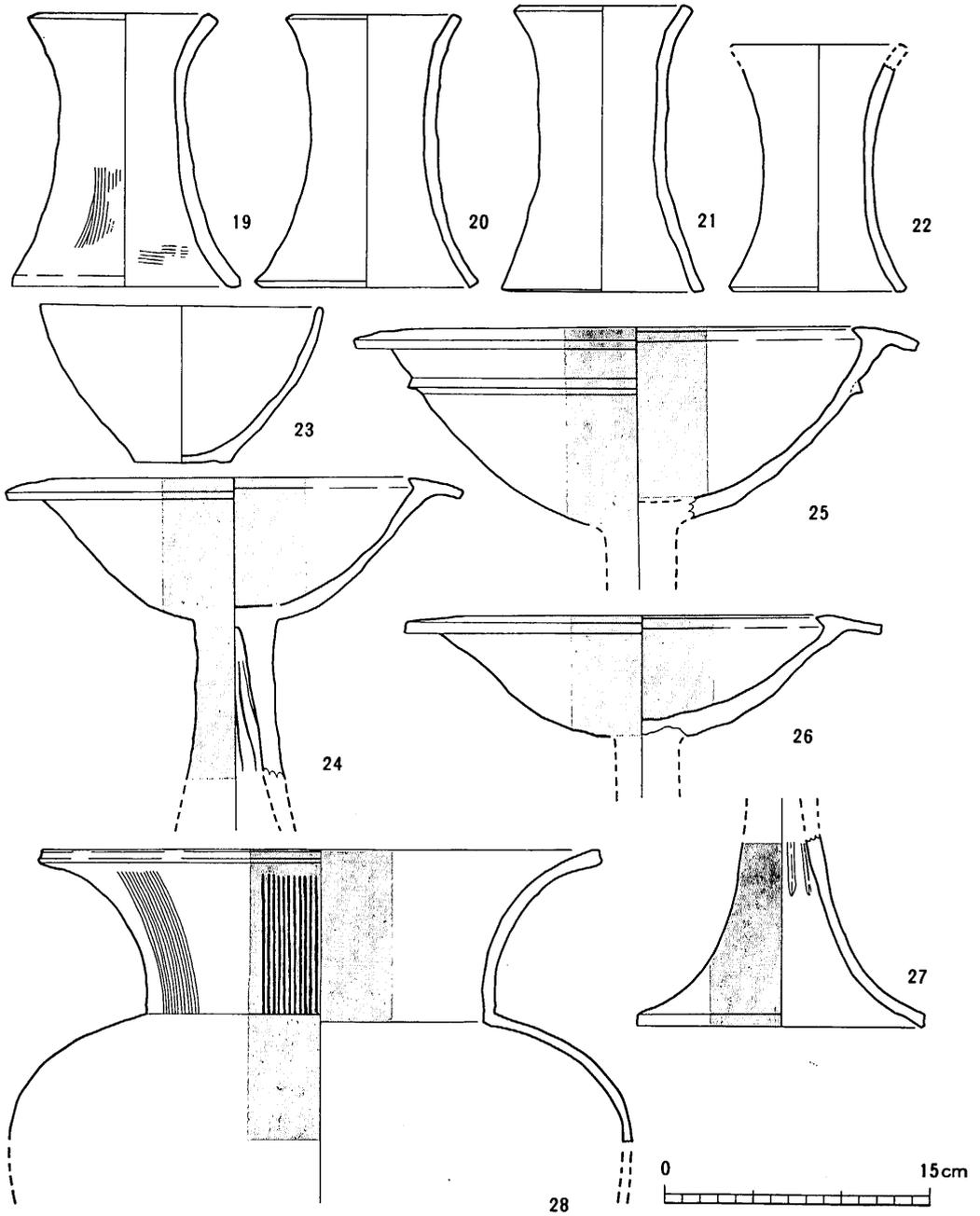
28は壺で胴部中ほどから下を欠失する。口縁はいわゆる単口縁で、口径31.8cmを測る。口頸部は大きく外反し、胴部は肩が張る「いちじく」形を呈すものと思われる。器面は胴部内面を除き丹が塗られ、頸部に暗



第3図 1号住居跡実測図(縮尺1/60)



第4图 1号住居跡出土土器実測図(縮尺1/4)



第5图 1号住居跡出土土器実測図(縮尺1/4)

文を施す。器面は磨滅し不明瞭であるが、胴部外面はヘラ削りが施される。

第6図は鉈である。全長83mm幅14cm厚さ4mmを測る。ほぼ直線を呈し、比較的短い。断面U字形の棒状部に鋒をつくり出したものである。先端部は山形を呈し、刃部を作り出すが、刃は鈍い。

(2) 貯蔵穴 (第7図 図版7(1))

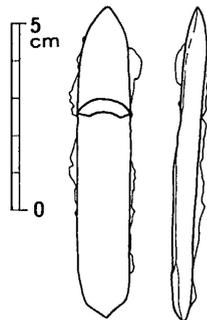
遺跡の西端に位置する。上部は北西部を除いて崩れ落ちる。壁は大きく張り出し、1.7×1.85mを測る。入口が貯蔵穴の中央にあると仮定すれば北西部の残存状態から径70cm程度の入口であったと推定される。床面は1.4×1.45mの隅丸方形に近い円形を呈すが、北側は最大10cm程度の段を介して床面に至る。

貯蔵穴内からは、床面より50~60cm程度浮いて甕が3個体出土した。

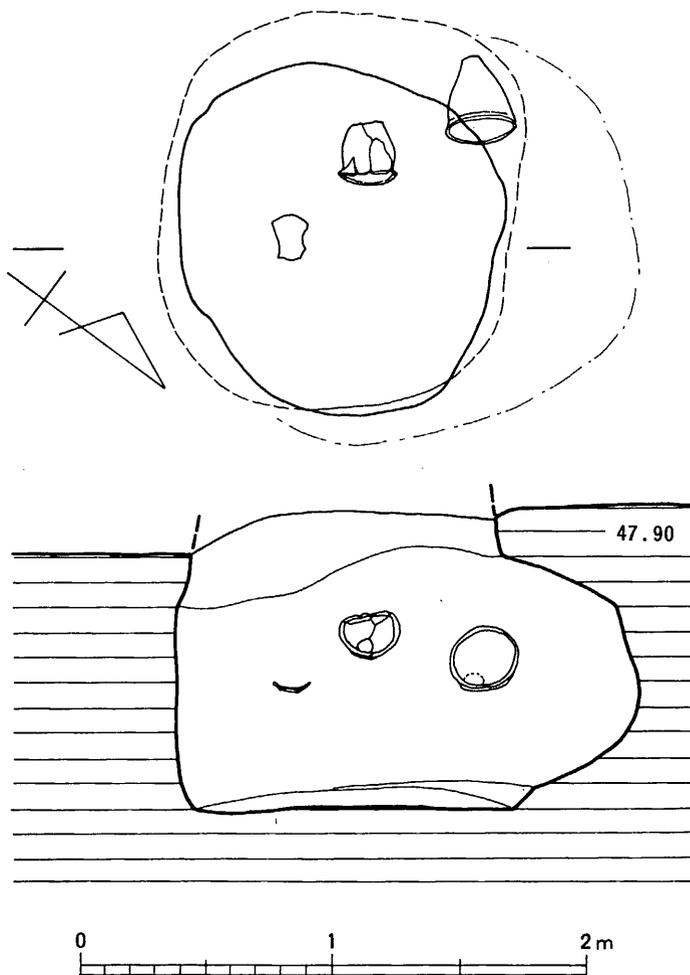
遺物 (第8図 図版7(2))

1は器高31.1cm口径28cm、底径8.5cmを測る完形品である。口縁はゆるやかに外反し、いわゆる如意形口縁をなす。口唇部下端には刻目を施す。口縁下にも刻目を入れた三角凸帯をめぐる。胴部はあまり張らずに直線的に底部に至る。

外面の調整は凸帯下から口縁部にかけて横方



第6図 1号住居跡出土鉄器実測図 (縮尺1/2)



第7図 貯蔵穴実測図 (縮尺1/30)

向，以下は縦方向の刷毛目が認められる。胴部下位から底部にかけて赤変がみられ，胴部上位以上にはススの付着が認められる。

内面の器壁は粗く，胴部には煮沸時のコゲ痕が残り下位は著しい。口縁部はヨコナデされる。

2は底部を欠失する甕で口径22.2cmを測る1と同様な如意形口縁を呈し，口唇部下端に刻目を入れる。胴部はあまり張らずに立ち上がって，いったん頸部ですばまる。外面は縦方向の刷毛目が認められる。口縁部はヨコナデされる。胴部中位から口線部にかけてススが付着し，胴部下半は赤変する。内面は縦方向のナデが認められ，胴部下位に煮沸時のコゲ痕がみられる。

3は口縁部の小片で，口径29.8cmを測る。逆L字形口縁で，口縁内側が僅かに張り出す。口縁上面はやや丸味をもち端部は下がる。胴は上位が張るものと推測され，胴部外面は縦方向の刷毛目が施される。

(3) 井戸 (第9図 図版8(1))

遺跡の北側1号住居跡の南隣に位置する素掘りの井戸である。上面は南北1.4m東西1.5mの不整形な円形プランを呈す。

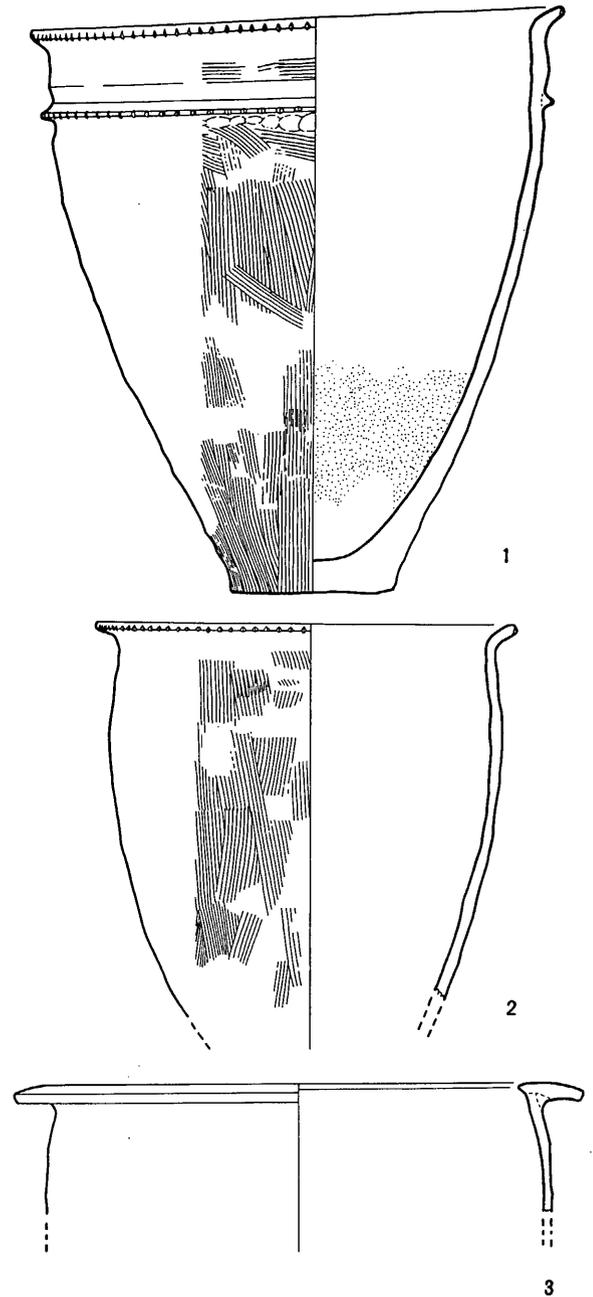
上部はすでに削平されているものと思われるが，現況で深さ2.75mを測る。西側の上面に近い位置に僅かな段を有す。

底部は西側が東側より15cmほど深く，底面は直径約95cmの略円形プランを呈す。

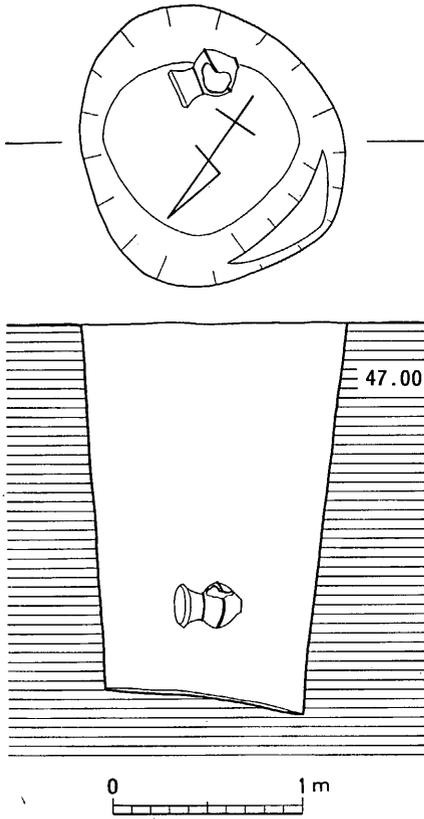
井戸内からは，底面より約35cm浮いて複合口縁をも壺つがほぼ完形で出土し，そのすぐ上部から大形の甕が碎け散った状態で出した。

出土遺物 (第10図 図版8(2))

1はいわゆる複合口縁の壺で，器高36.3cm，口径21.3cm，底径7.8cmを測る。口縁部はや



第8図 貯蔵穴出土土器実測図 (縮尺1/4)



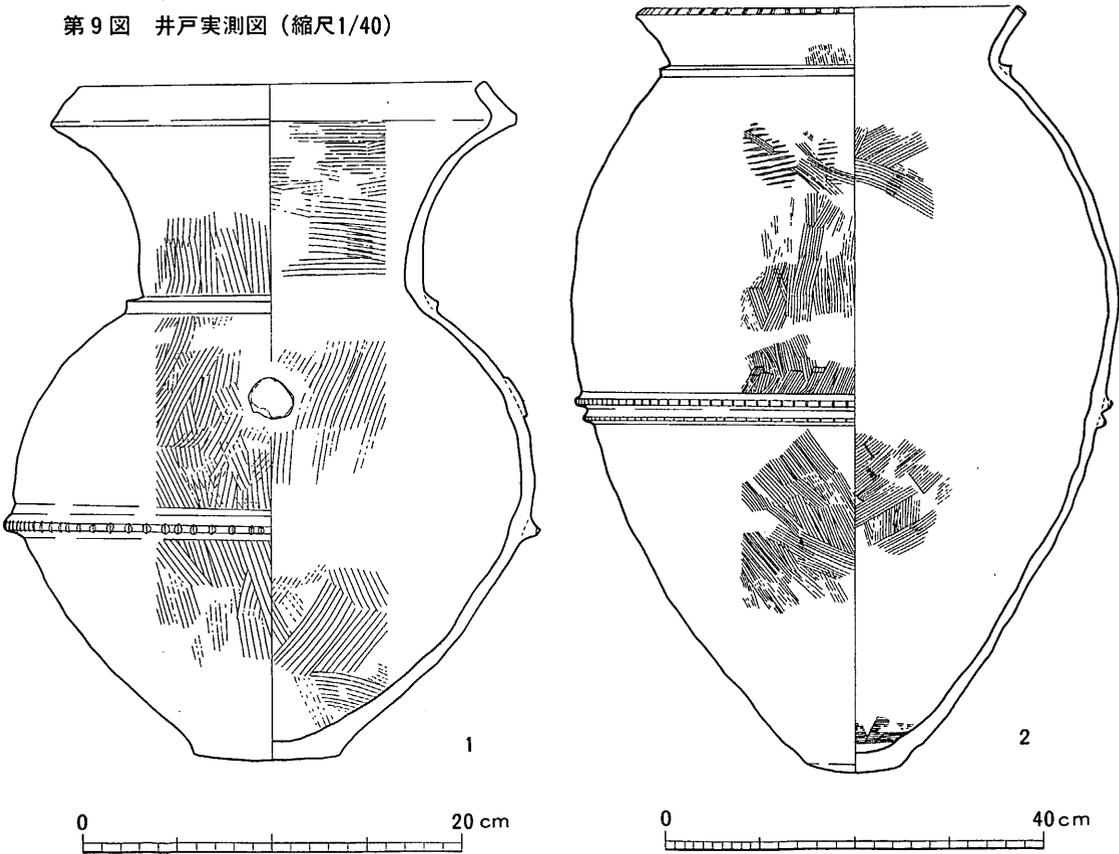
第9図 井戸実測図 (縮尺1/40)

や外湾気味に内傾し、頸部はしまり卵形の胴部へ続く。頸部下と胴部中位に各一条の三角凸帯を貼付し、胴部の凸帯には刻目を入れる。また肩部には直径2cmほどの薄い円盤状の粘土を貼付する。底部は浅いレンズ状を呈す平底である。調整は内外面とも刷毛仕上げされる。

2は大形の甕で、器高82.4cm、口径41.8cmを測る。口頸部は「く」字状を呈し、口縁部は直線的に外傾する。

口唇部には刻目が施され、頸部には1条の三角凸帯が貼付される。

胴部は卵形を呈し、最大径位よりやや低い位置に刻目をもつ2条の三角凸帯をもつ。底部は直径10cm程度と小さく、厚いレンズ状を呈す丸底に近い平底である。調整は内外面とも刷毛仕上げされ、肩部にタタキが残る。



第10図 井戸出土土器実測図 (縮尺1/4・1/8)

(4) 木棺墓・土墳墓

1号木棺墓(第11図 図版11-1)

墓壙は南隅部に40×60cmの突出部をもつものの、略方形の平面プランを呈し、断面は突出部が中位まで掘られ、壙底のプランは90×110cmの略正方形を呈し、棺は西側をあけて造営され、両側板と北戸口部については溝は認められず、南戸口部については、戸口板の補強とみられる3つの小穴が認められる。また、棺外縁は粘土をまき作っていて、棺は主軸をN-36°-Eにとり、棺内法量は35×80cmを測る木棺墓である。なお、遺物として弥生時代中期の土器片が出土しているが、被葬者に対する副葬品ではない。

2号木棺墓(第12図 図版11-2)

1号木棺墓より南に2m離れた所にあり、墓壙のプランは1号木棺墓と同様南側に突出部をもち斜方形を呈し、約100cm程掘り下げ、壙底のプランは台形をし、棺は主軸をN-26°-Eに向け西よりに造営され、棺の外縁は粘土をまわして仕上げている、戸口・側板の溝は認められなかった。棺内法量は40×85cmを測る。また、木棺墓より被葬者の副葬品とは異なるが、弥生時代の土器・石器片が出土している。

遺物

石庖丁(第15図 図版15) いずれも頁岩製で完成品である。1は先端部、2は両端を欠いたもので、使用痕も認められる。

弥生式土器(第14図) いずれも弥生式土器の底部である。底部より胴部に至る開き具合から、1は甕形土器、2は壺形土器と推測される。

3号木棺墓(第11図 図版11-3)

2号木棺墓の南に位置し、1・2号木棺墓と異なり北側に浅い突出部を有し、プランは120×160cmの不整形を呈す。墓壙は85cm程掘り下げ断面は台形を呈し、壙底で115×110cmの略正方形となる。棺は主軸をN-32°-Eにとり、北側壁に戸口部を接して造営され、戸口、側板の溝は認められず、底及び周囲に粘土をまいている。棺内法量は40×85cmを測る。

4号木棺墓(第12図 図版11-4)

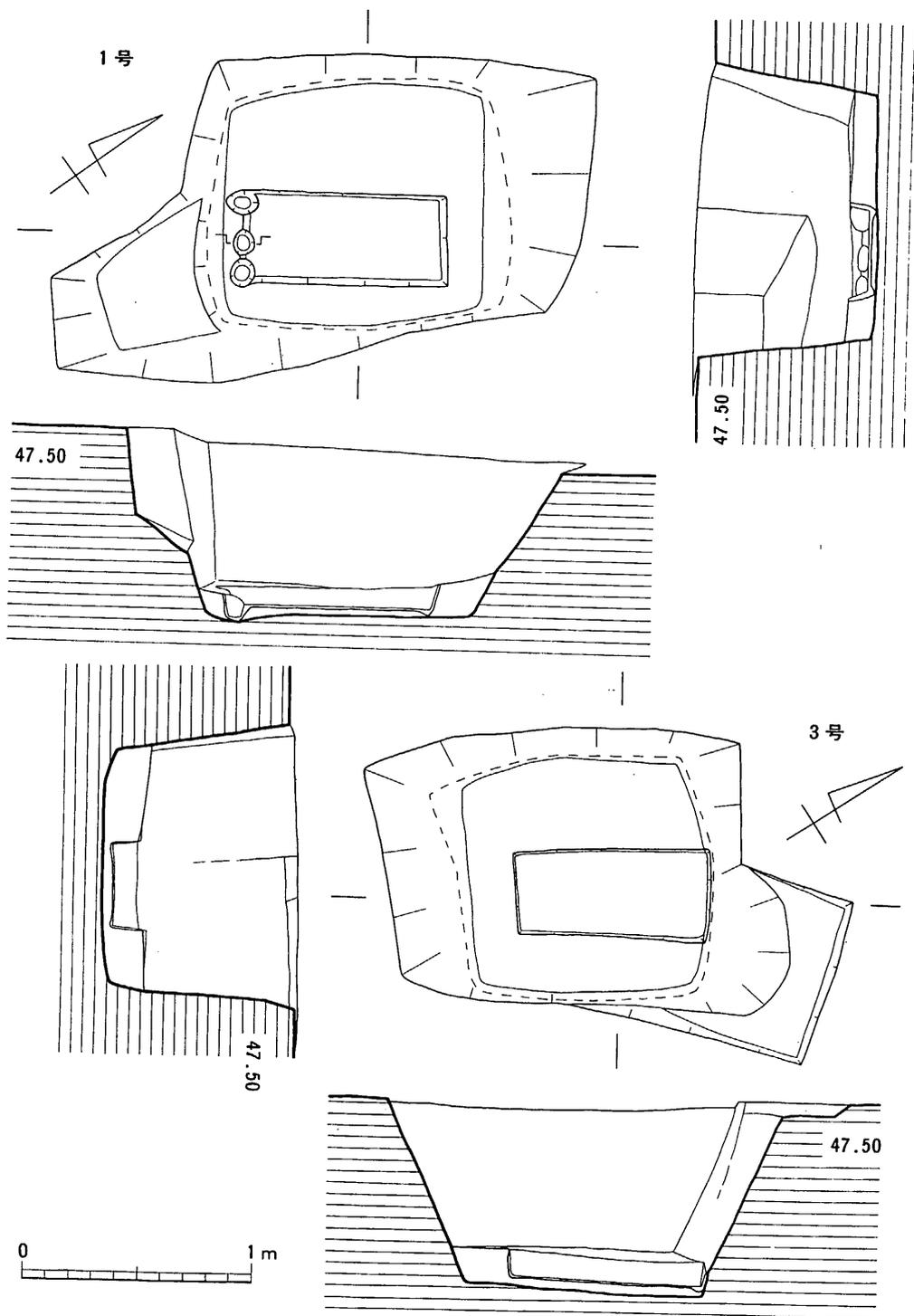
平面プランは戸口部をややふくりました長方形を呈し、50×210cmを測る。壙底はフラットで、両戸口部を約30cm程掘り込み戸口板を設置したものであろう。側板の溝は認められない。主軸はN-66°-Eに向け、棺内法量は35×135cmを測る木棺墓である。

5号木棺墓(第13図)

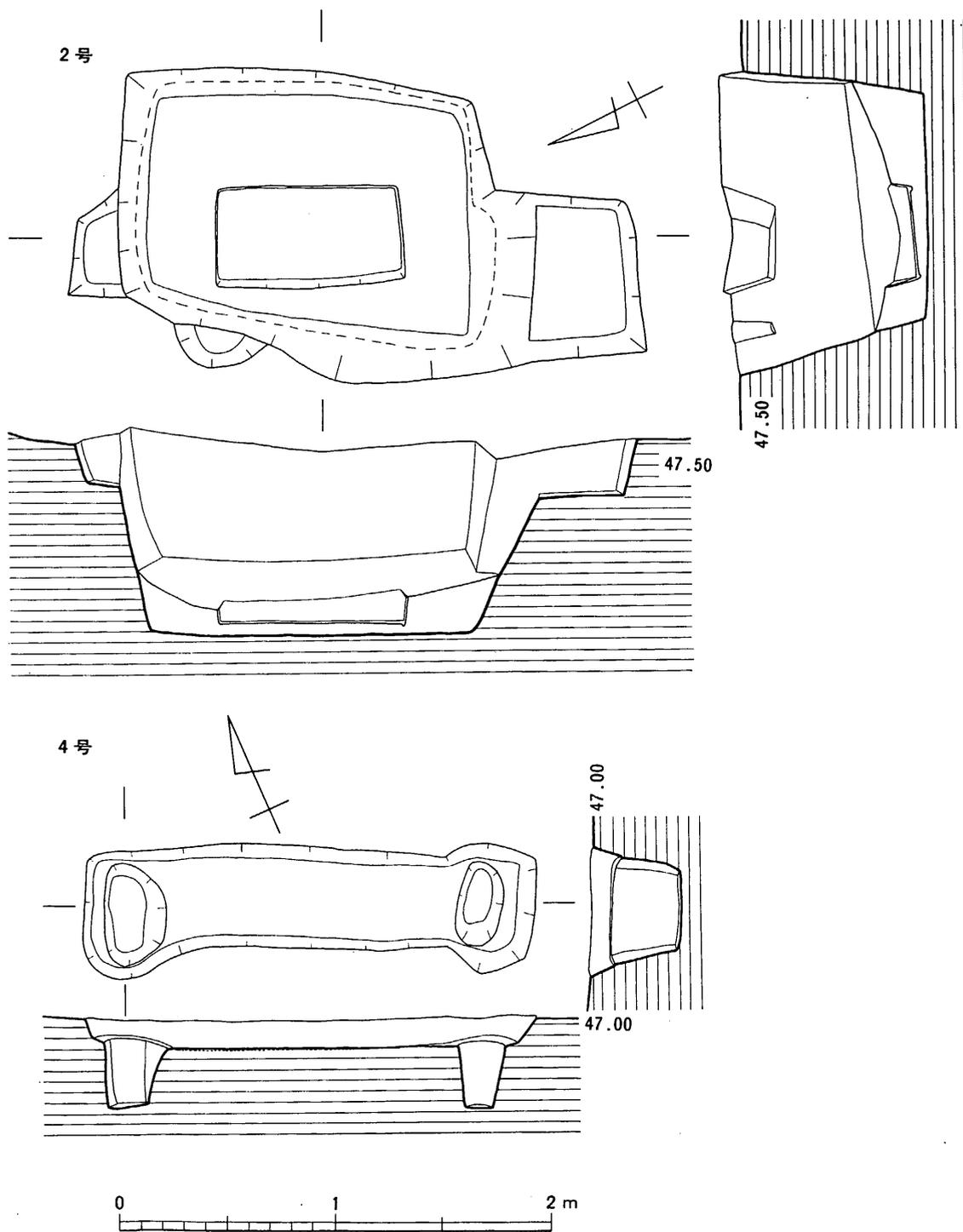
上部が削平を受けて墓壙ははっきりしないが、東側部に本来の形を考えることができる。

木棺は、両戸口部を15~20cm程掘り込み、戸口板を設置したものであり、側板の溝は認められず、棺内法量は35×135cmを測り、主軸はN-66°-Wを示す。

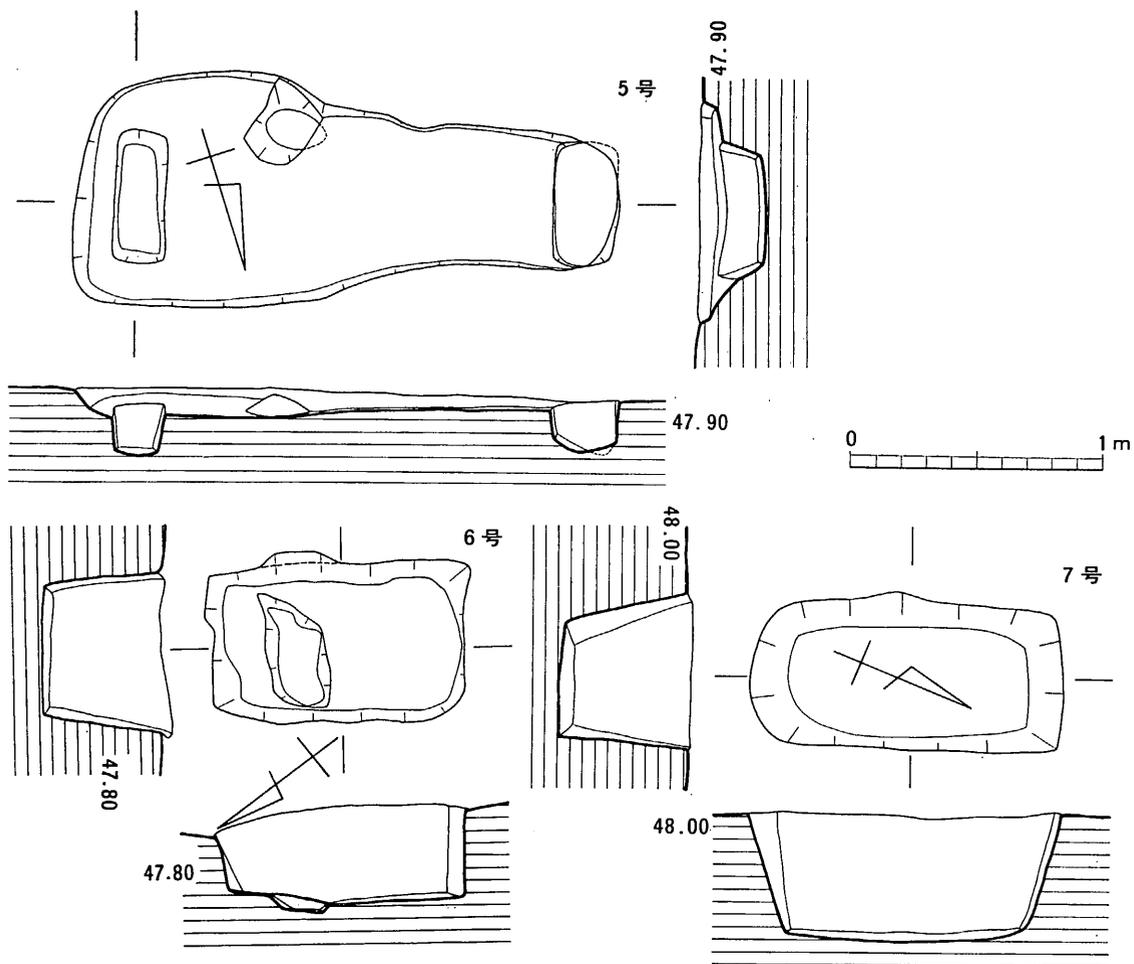
6号土墳墓(第13図)



第11図 1・3号木棺墓実測図（縮尺1/30）



第12図 2・4号木棺墓実測図 (縮尺1/30)

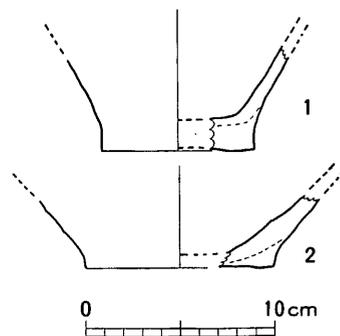


第13図 5・6・7号木棺墓・土墳墓実測図 (縮尺1/30)

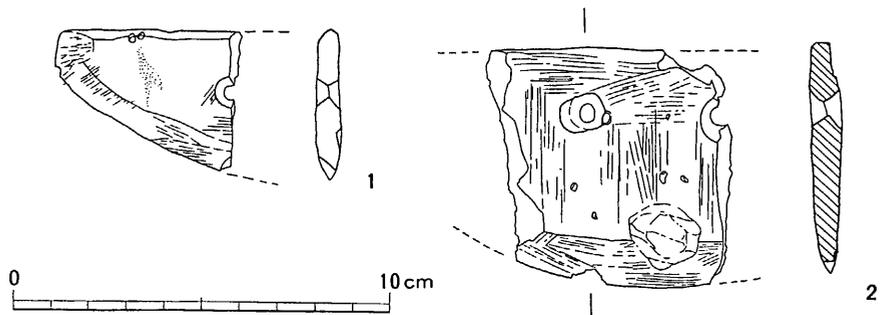
墓壇は平面 $60 \times 100\text{cm}$ を測る方形を呈し、ほぼ垂直に 40cm 程掘り下げている。主軸は $N-37^\circ-E$ を示し、壇底に 5cm 程の孔があり、性格は不明である。

7号土壇墓 (第13図)

$60 \times 125\text{cm}$ を測る方形の土壇墓である。深さは約 50cm で、壇底はフラットであり、主軸は $N-23^\circ-E$ を示す。



第14図 2号木棺墓出土土器実測図 (縮尺1/4)



第15図 2号木棺墓出土石器実測図（縮尺1/2）

（5）甕棺墓

甕棺墓は調査地域の南隅に集中し、成人用甕棺2基、小児用甕棺1基が検出された。

1号甕棺墓（第16図 図版9-1）

墓壙は調査前に盗掘を受けていて不明瞭な点が多いが、長方形の墓壙を掘り、下甕を横穴に挿入したと考えられ、墓壙は上甕部において2段に掘り込まれていて、130×200cmを測り、ほぼ同大の甕形土器を接口させて挿入している。接口部は粘土により目貼りをし、棺の主軸はN-65°-Eであり、-11°の傾斜で埋置した成人用甕棺墓である。

2号甕棺墓（第16図 図版9-2）

1号甕棺墓と同様盗掘を受けて不明であるが、長方形の竪穴を掘り下甕を横穴に挿し入れたものであろう。墓壙は深さ50cmで段をもち、それより上甕に合せて底を湾曲させて仕上げている。甕棺はほぼ同大のものを接口して挿入している。棺の主軸はN-42°-Wを向き、-4°の傾斜をもって設置した成人用甕棺墓である。

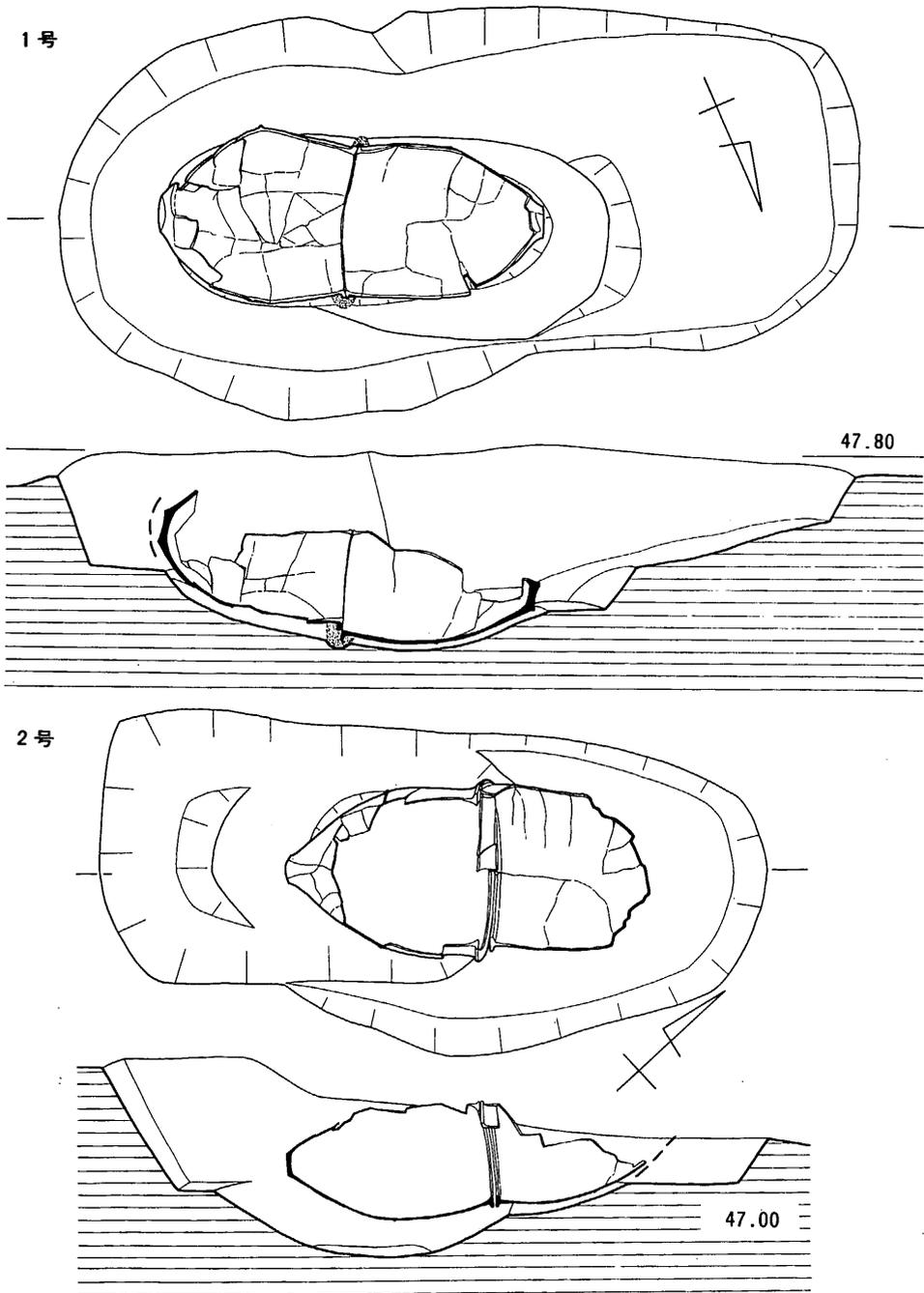
3号甕棺墓（第17図）

著しく削平を受け大破した甕棺墓であり、現況で墓壙は不整形を呈し、断面は南に段を有すことから、ほぼ同大の甕形土器を接口させ、マイナスの傾斜をもって、挿し入れたものと考えられ、甕棺は主軸をN-11°-Eを示している。

1号甕棺（第18図 図版10）

上甕 口縁部は逆L字状を呈し、やや外斜する。胴部は少し張りきみで器体のほぼ中位に断面三角形の貼付凸帯が一条めぐり、それよりやや上げ底気味の底部に張りながらすぼまる。器高79.6cm、口径67cm、底径12.2cmを測り、器体外面に交差状に刷毛目を施した後に荒くナデ消している。内面はヨコナデしている。色調は黒褐色で砂粒をやや多目に含み、焼成は良好である。

下甕 口縁部は逆L字状を呈すが上甕ほどの発達はなく、平坦面も短い。胴部はやや張り、

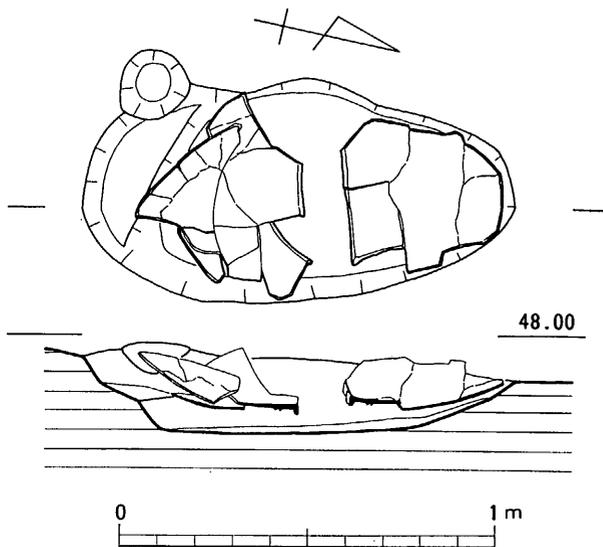


第16图 1・2号壙墓実測図(縮尺1/30)

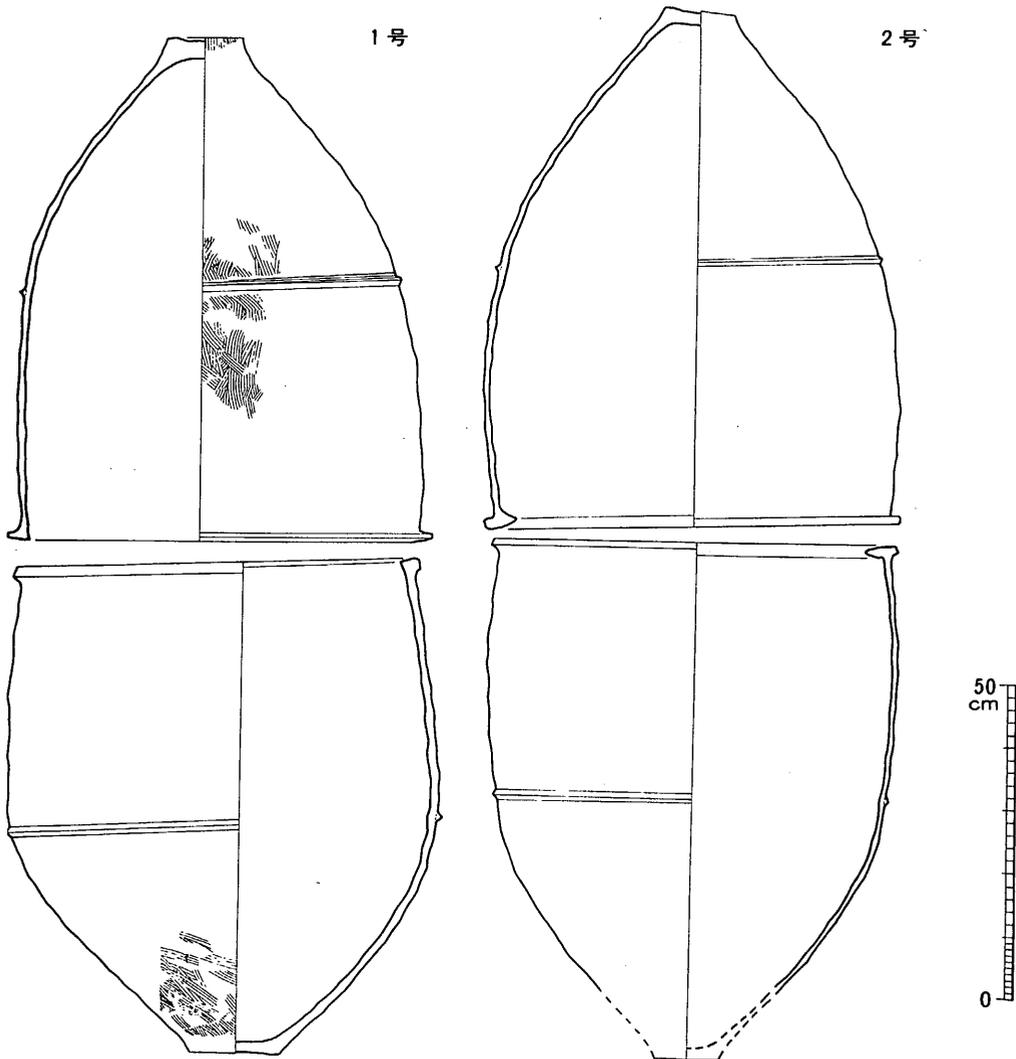
中位より下に断面三角形の貼付凸帯を施し、ずんぐりしながら底部に至る。器高 78.6cm，口径 63.6cm，底径 14cm を測り，調整は刷毛目をより丁寧にナデ消している。色調は暗黄褐色で，焼成は良好である。

2号甕棺（第18図 図版10）

上甕 口縁部は逆L字状から



第17図 3号甕棺墓実測図（縮尺1/20）



第18図 1・2号甕棺実測図（縮尺1/12）

T字状に近づくが不完全であり、内面が肥厚であり平坦面が広がる。胴部はやや張り中位下に断面三角形の貼付凸帯があり、あまり張らずに底部に至る。

調整はナデあげていて、口縁及び内面に若干の黒塗りをみる。器高81.3cm、口径65.6cm、底径11cmで焼成はあまい。

下甕 口縁部はT字状に近づくが不完全で内側への発達が見られ、まだ内傾している。胴部は少し張り中位に断面三角形の貼付凸帯があり下位も張りを残す。

底部は欠損している。調整は完全にナデ上げていて、内面に若干の朱を見る。

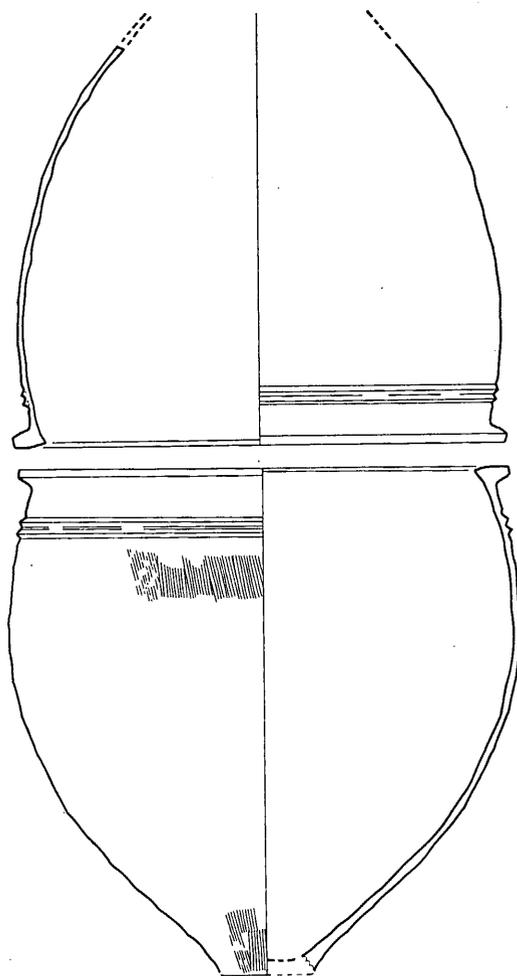
器高は81cm程度、口径64.4cm、焼成は良好である。

3号甕棺 (第19図 図版10)

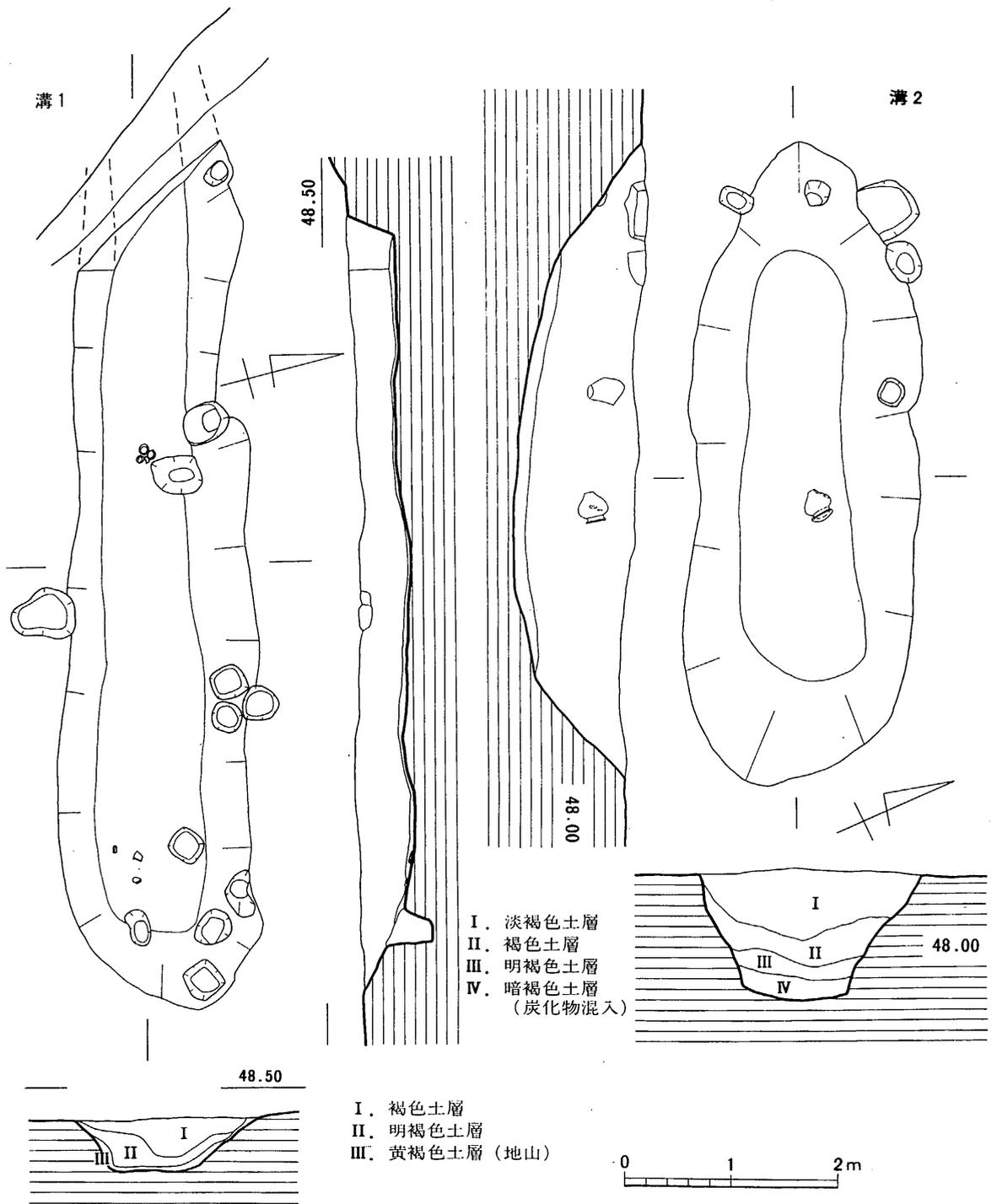
共に底部を欠損する。口縁部は逆L字状を呈するやや小ぶりの甕形土器であり、口縁直下に複合凸帯を有し、胴部は張り全体的に丸味をもっている。器体外面に若干刷毛目を残していて、胎土は不良で焼成はあまい。口縁は52~53cm、器高は53cm前後と推測される。

(6) 溝 (第20図 図版12-1)

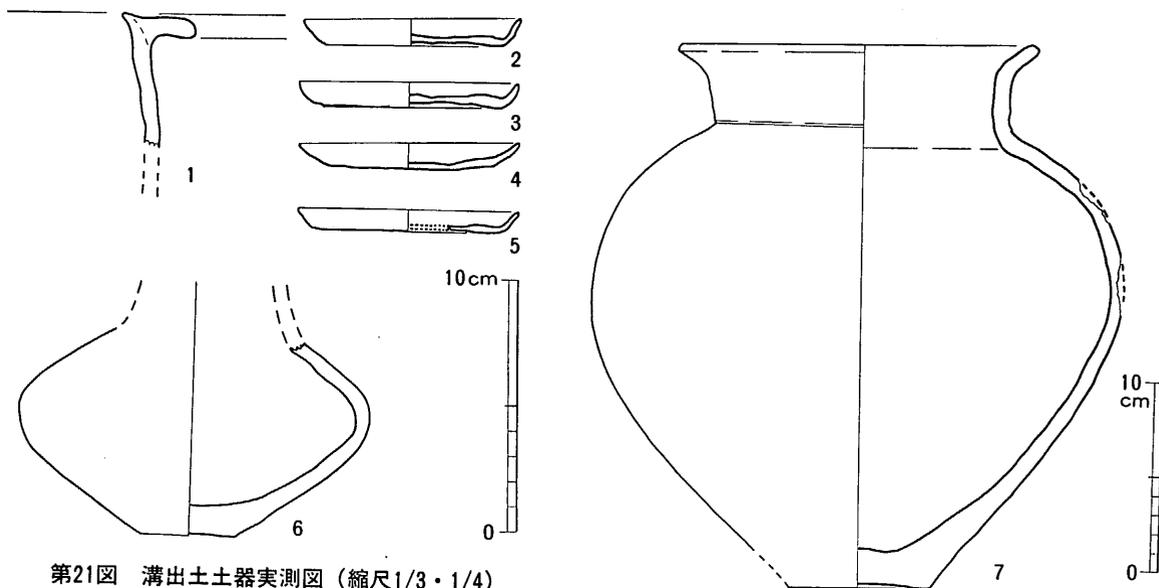
調査区の西側に副180cm、深さ50cmの断面逆台状の溝(溝1)が西側に延び端は調査区外へたっている。溝の内、縁部にいくつかの柱穴を見るが、溝との関係は不明である。また溝は2層によって埋まり、1層より土師器皿、須恵器片、2層より弥生式土器片、磨製石剣片が出土した。溝1の西側に幅210cm、長さ6mの隈丸長方形の遺構があり、それを便宜的に溝2とした。溝2は、深さ120cmで溝底は1×4mのフラットな面をもち、長軸断面形は逆台



第19図 3号甕棺実測図(縮尺1/8)



第20図 溝1・溝2実測図(縮尺1/60)



第21図 溝出土土器実測図 (縮尺1/3・1/4)

状を呈する。溝は4層をもって埋っていて、2層上面より、弥生時代の壺形土器の完形品が1個出土した。

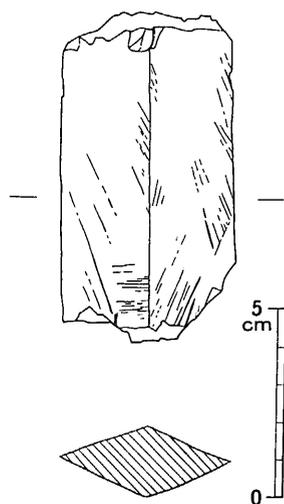
溝出土遺物 (第21・22図 図版12・13)

弥生式土器 (第21図—1・6・7) 1は口縁部を逆し字状に呈する甕形土器の小片である。6 (図版12—(2)2)は口頸部を欠損した小形の壺形土器で、胴部最大径14cm、現存高8cmである。7 (図版12—(2)1)は口縁部は大きく外反し、頸部は短く直立し胴部との境に僅かな段を有し、胴部最大径はやや上位にあり丸味をもち、底部にかけて直線的に下り少し上げ底気味の底部に至る。器高は28.5cm、口径19.1cm、胴部最大径28cmを測る壺形土器の完形品であり、焼成は良好である。

土師器 (第21図2~5 図版13—1~4)

全て小皿である。口径8.6~8.8cm、底径6.2~7.8cm、器高0.9~1.1cmであり、器面は横ナデが、内底にはナデが施され、底面は全て糸切りであり3はその後に板目がついている。色調は淡黄褐色~淡赤褐色を呈し、焼成はあまい。

磨製石剣 (第22図 図版12—(2)4) 先端・基部の両端を欠損した磨製石剣の完成品であり、現存長7.8cm、幅4.6cmを測り、かなりの大形品と推測する。表面は斜方向から磨き上げられ断面は均正のとれた菱形を呈す。石材については硬質砂岩と思われる。



第22図 溝出土石器実測図 (縮尺1/2)

3 古墳時代の遺構と遺物

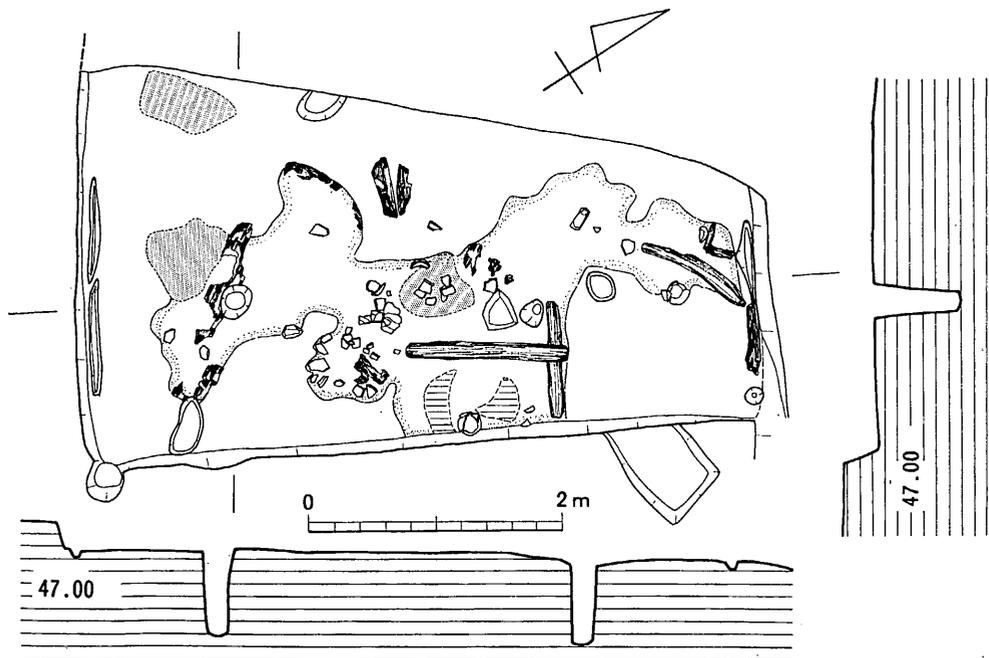
(1) 住居跡

2号住居跡 (第23図 図版4(2))

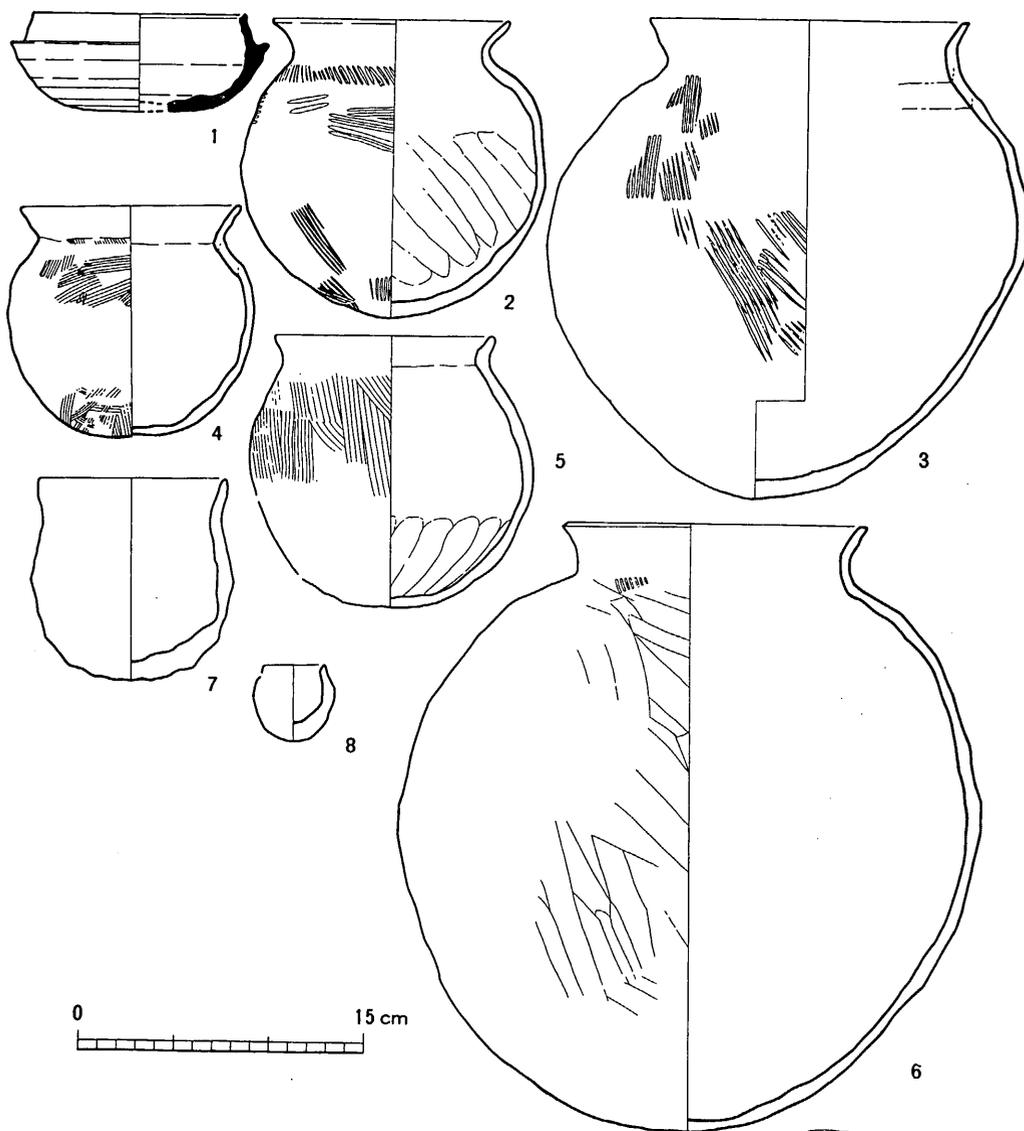
調査区の東端で検出した方形プランをもつ住居跡である。西～北部はすでに破壊され、 $\frac{1}{2}$ 程度が残存するにとどまる。規模は明確でないが、南側壁下と北側に幅 16cm 深さ 5cm の浅い溝が残り、北側の溝が南側同様壁下にあるとするならば南北 5.5m 程度と推定される。主柱は東側から 1.2m の所に 20~30cm の柱穴が 2 穴認められ、推測される住居跡のプラン・規模から 4 本柱と思われる。主柱の間隔は南北で 2.65m を測る。この住居は火災にあったと思われ、建材の焼炭化片や、かや、藁の焼けたものが覆う。東壁にはカマドが設置され、上に甕がのせられたままとされている。出土した土器の多くは、かまどの南側をとりまくように出土した。

遺物 (第24・25図 図版6)

1は須恵器の坏身で、カマドの西側約 80cm の所より出土した。口径 11.1cm 受部部径 13.4cm 器高 5.2cm を測る。立ち上りは高く 1.7cm を測る。受部は上方に僅かに引き出される。体部は深く、底部は右廻りの回転ヘラ削りが施される。2~8は土師器の甕である。口頸部は「く」字状を呈するもの(2・4)とやや外傾するもの(3・5・6・7)に分けることができ、胴部はいずれも球状を呈するが、3は尖り気味の丸底を呈す。2はカマドの上におかれて

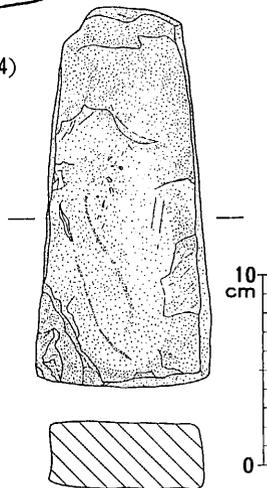


第23図 2号住居跡実測図 (縮尺1/60)



第24図 2号住居跡出土土器実測図(縮尺1/4)

いたもので、器高 15.6cm 口径 12.5cm 胴部径 15.8cm を測る。胴部外面はタタキが施され、内面は粗く削り上げられる。3は器高 25.2cm 口径 17cm 胴部径 25.2cm を測るが、ややびつな形態を呈す。胴部外面にはタタキが施される。4は器高 12.1cm 口径 11.6cm 胴部径 13cm を測る。胴部外面は刷毛仕上げされ、内面は指圧痕などの凹凸が多く十分な調整がなされていない。5は器高 14.2cm 口径 11.6cm 胴部径 14.8cm を測る。口頸部は短く、胴部外面は刷毛仕上げされる。内面はヘラで削り上げ



第25図 2号住居跡出土石器実測図(縮尺1/4)

られ、底部付近は強く施される。6は北側の柱穴横から出土したもので、器高 31.8cm 口径 16cm 胴部径 30.7cm を測る。肩部に丹が残る。胴部は内外面ともにヘラ削りされ、頸部下にタタキが若干残る。7は器高 10.5cm 口径 10cm を測る。頸部のしまりは緩く、胴部もあまり張らない。調整はみられず、指圧による凹凸が著しい。9は手づくねのミニチュア土器で、器高 4 cm 口径 3.2cm, 胴部径 4.3cm を測る。

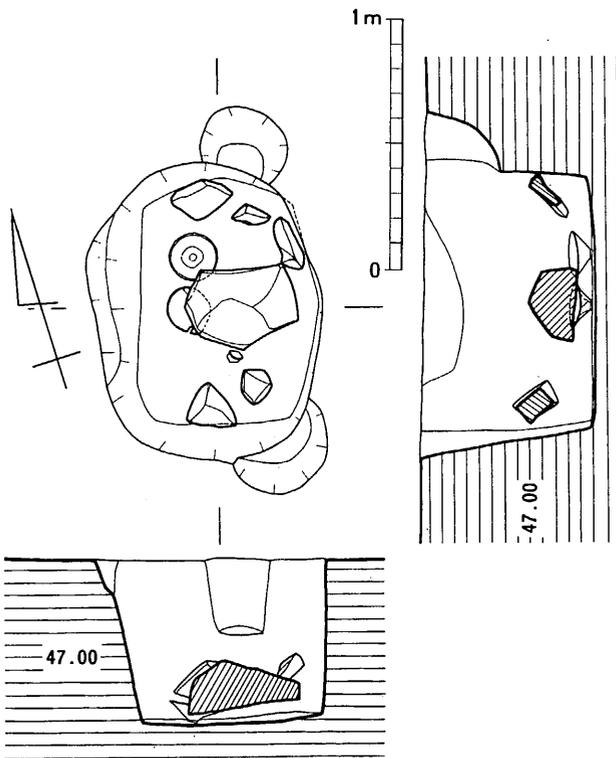
第25図は北側柱穴より出土した砂岩製の砥石である。長さ 20cm 幅 9.3cm 厚さ 3.6cm をを測る。両端を除く四面を使用する。

4 歴史時代の遺構と遺物

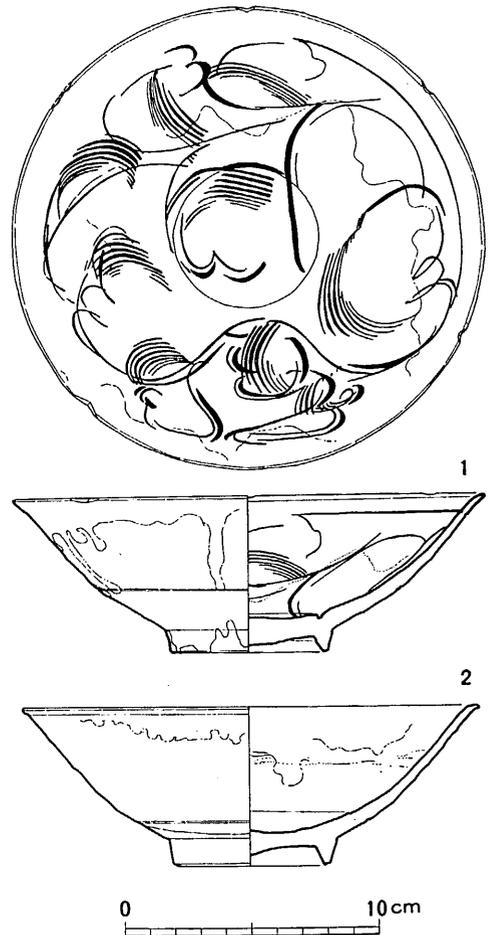
土 壙

(1) 1号土壙 (第26図 図版(1))

主軸を N-16°-E により 120×90cm の不整形方形を呈し、ほぼ垂直に掘り下げ、壙底はフラットで主軸に沿って、2個の白磁碗が置かれていた。また、そのうち1個は落ち込んだ大石



第26図 1号土壙実測図 (縮尺1/30)



第27図 1号土壙出土磁器実測図 (縮尺1/3)

(35×45cm)により破損している。このことは、土壌に蓋があり、それらの石で蓋を押えていたものと考えられる。

遺物 (第27図 図版14-(2))

白磁劃花文碗 (第27図-1 図版14-(2)1) 口縁端部はやや水平をし5ヶ所に輪花を配し体部内面上位に浅い沈線と見込みの部分に沈線状の段をもつていて、櫛で花文を描いている。口径18.7cm, 器高6.2cmを測る。釉は白灰色で胎土は灰味白色である。

白磁碗 (第27図-2 図版14-(2)2) 口縁部は外反し水平になり、体部内面見込みの部分に低い段をもち、無文である。口径18cm, 器高6.3cmを測る。釉は黄味白灰色を呈する。

5 その他の遺構と遺物

(1) 不明土壌

2号土壌 (第28図 図版15)

長軸をN-37°-Eに向け、260×205cmの隅丸方形を呈し、墳底まで約30cmと浅く、北側がやや内湾している。墳内には柱穴が見られるものの、性格については不明である。また、弥生時代の土器が出土している。

出土遺物 (第29図)

いずれも甕形土器の口縁部片である。1は逆L字状を呈し、端部はやや外傾する。口径は25cmを測り、器面調整はナデている。2は逆L字状を呈するものの1ほどの発達はなく、口徑部に指圧による凸帯様のふくらみをもつ、胴部の張るものと考えられる。

3号土壌 (第28図)

平面プランは280×165cmの隅丸方形を呈し、長軸はN-54°-Wに向いている。墳は西に向かって2段のクッションをもって90cm程度掘られ、北西部壁は垂直に近い。土壌内より、まとまった遺物は見ず全て磨滅した土器片であった。

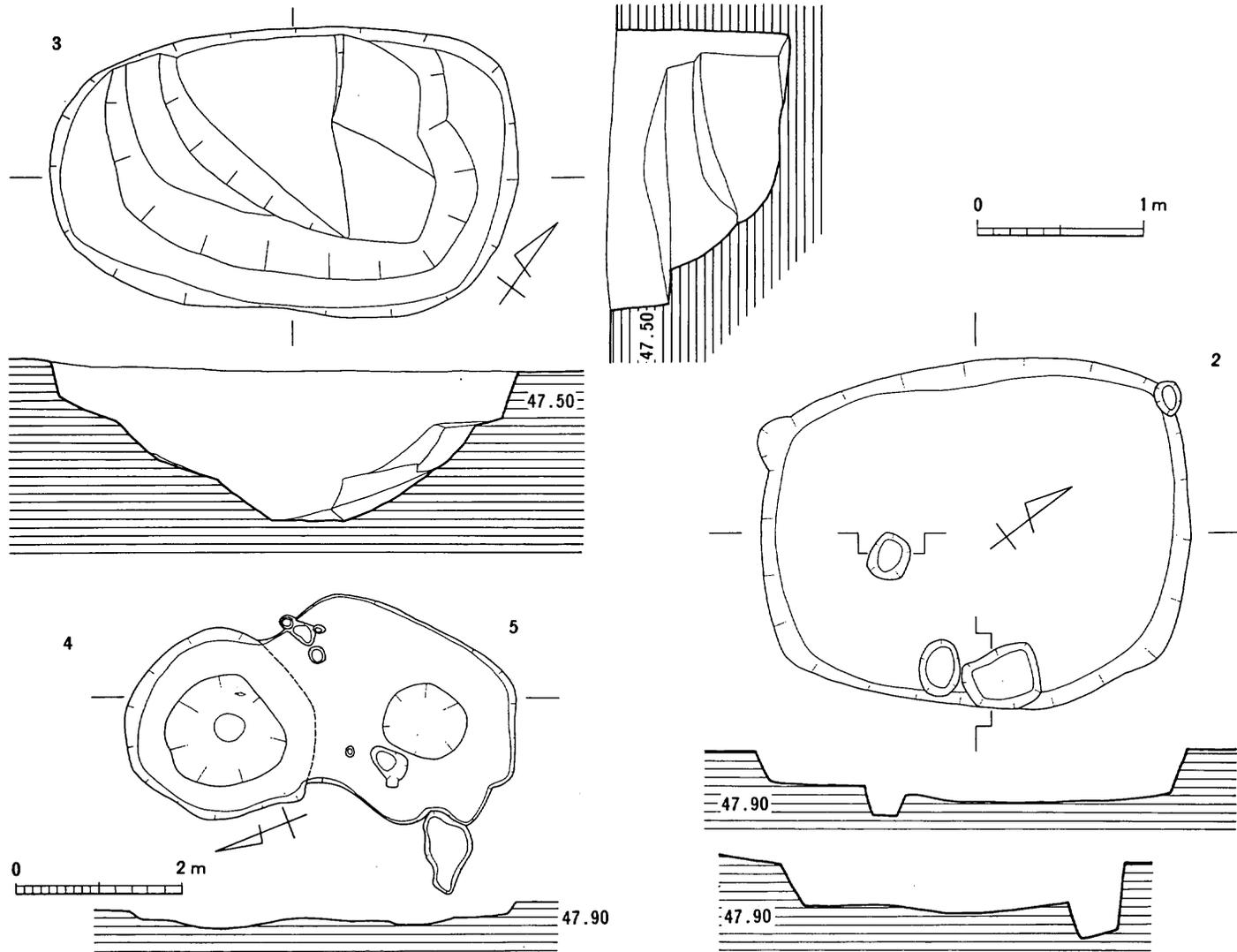
4号・5号土壌 (第28図)

上部が著しく削平を受けている。土壌は4号が5号を切っていて、4号の方が新しい。復元すると5号は230×300cmの不整形方形を呈し、墳底まで20cmと浅い。4号は230~250cmの略円形を呈し、墳底まで20cmと浅くレンズ状を呈する。いずれも磨滅した土器しか見ず、土壌の性格については不明である。

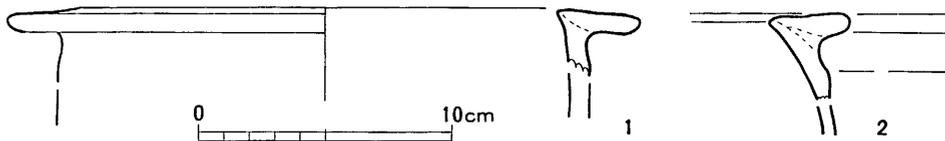
(2) ピット出土の土器 (第30図)

長頸壺 (第30図-1)

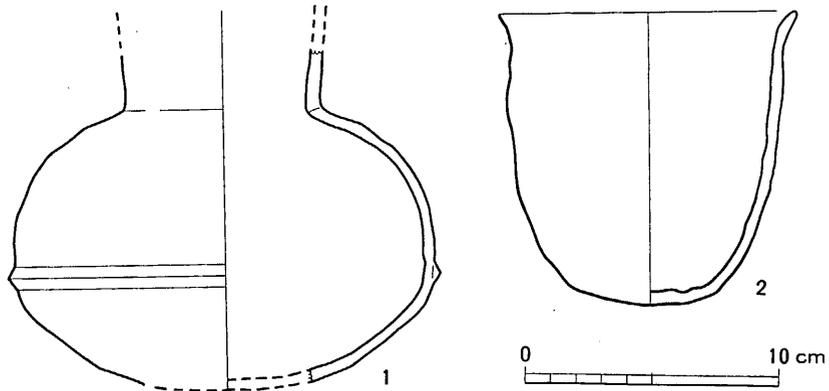
C地区のピット内より発見されたもので、口頸部を欠失する。扁球形の胴部に立ち気味に外反する長頸の口頸部がつく壺で、胴部中位やや下方に三角凸帯が一条めぐる。器体の調整は風化が著しく不明瞭であるが内面にハケ目が僅かに認められる。胎土は微粒の粘土であり、黄褐



第28图 2·3·4·5号土壤实测图 (縮尺1/40·1/80)



第29図 2号土坑出土土器実測図（縮尺1/3）



第30図 ピット出土土器実測図（縮尺1/3）

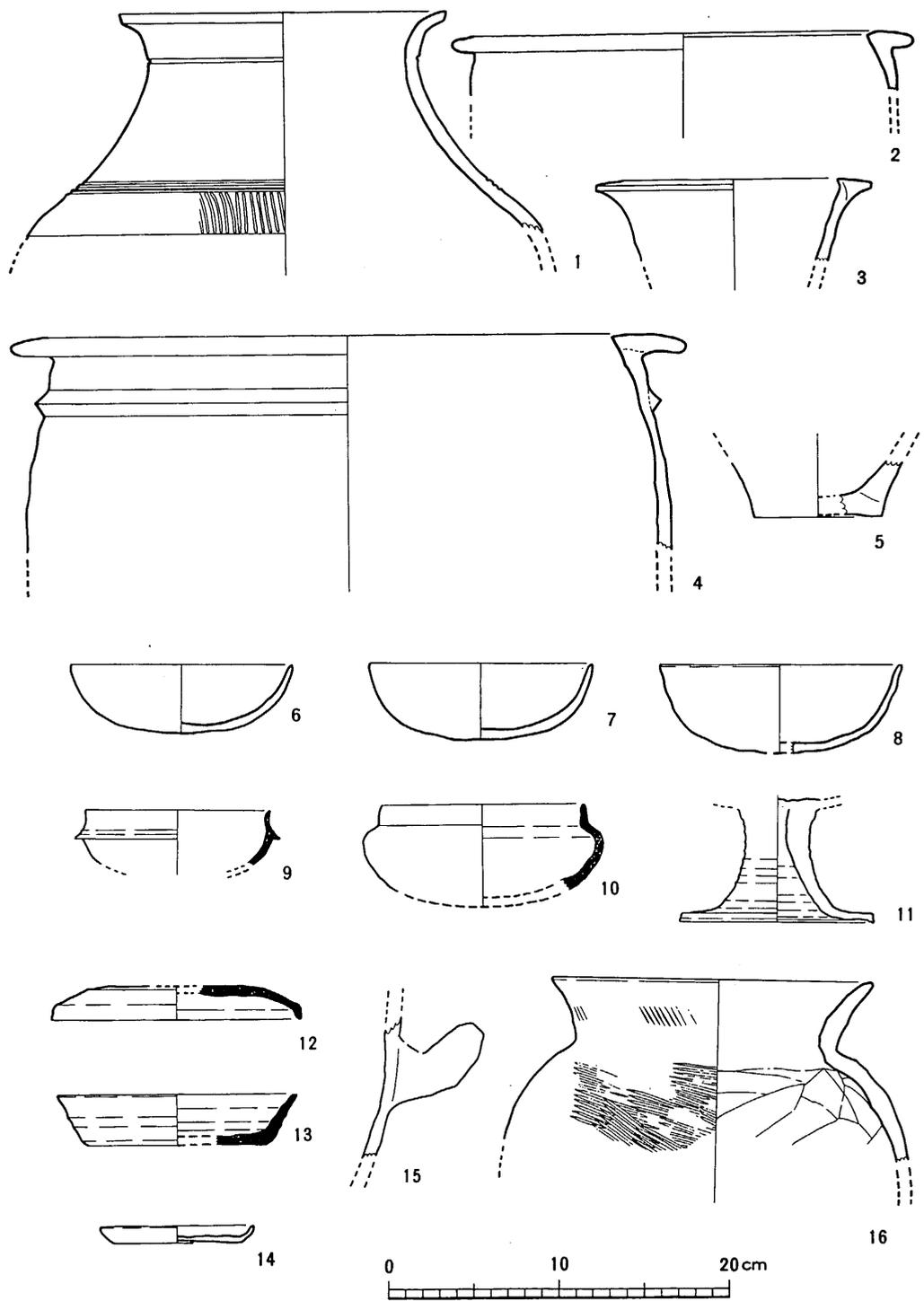
色を呈す。焼成はあまい。胴部最大径は17cm，残存器高は13.3cmを測る。

甕（第30図—2）

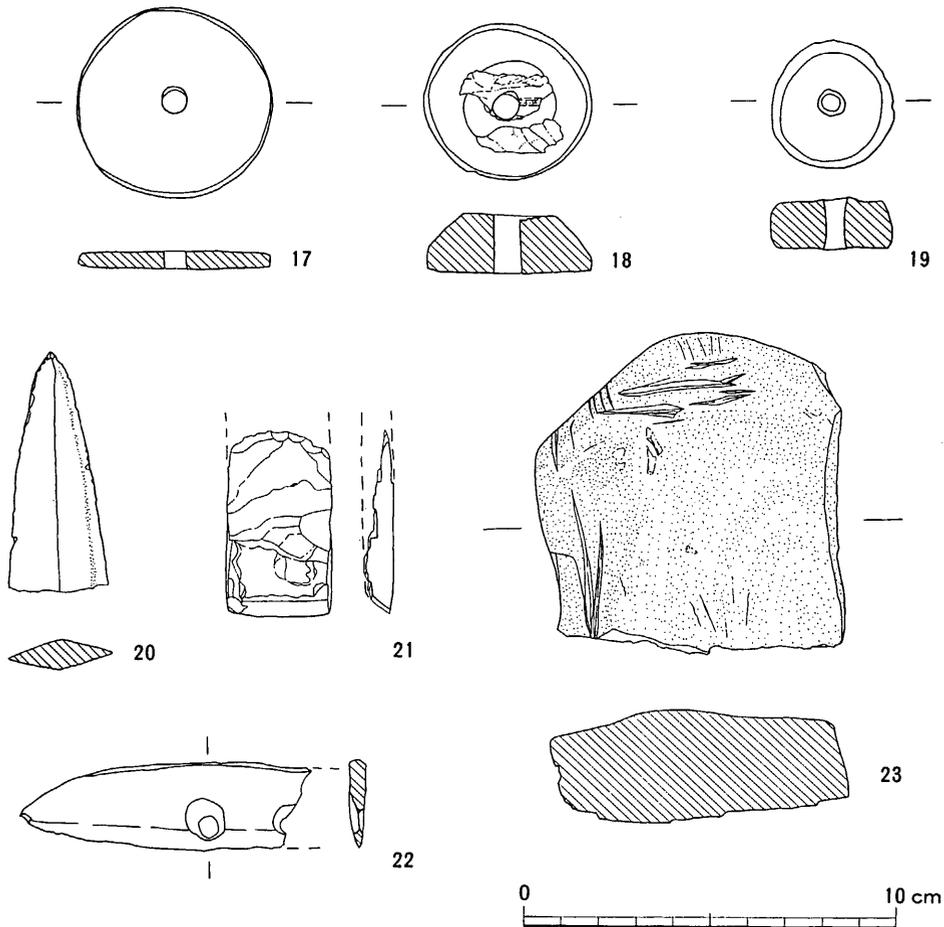
口縁部は僅かに外反し，胴部の張りは少なく丸底の底部に至る。器面は凹凸がありナデにより調整している。また，底部に3粒，靱の圧痕を見る。胎土は砂粒子を多く含み暗褐色を呈する。焼成はややあまい。外面には煤の付着があり煮沸用に使われている。器高11.7cm，口径11.8cmを測る。

（3）表採資料（第31・32図 図版12(2)―3・13―5～15）

1～5は弥生式土器である。1は口径19cmを測る壺の口頸部である。口縁下に1条，肩部に3条と数条の沈線をめぐらせ，肩部の沈線間には直行するヘラ描きの短沈線を充足する。2は口径27cmを測る逆L字状を呈する口縁部である。3は口径16cmを測る壺の口縁部である。4は口径39.8cmを測る甕の口縁部である。逆L字状の口縁をもつもので，口縁下に1条の三角凸帯をめぐらす。5は甕の底部で直径7.4cmを測る。6～8は土師器碗である。6は器高4cm口径13cm，7は器高4.5cm口径13cm，8は器高5.2cm口径14cmを測る。9～13は須恵器である。1は坏身で口径10.9cm受部径12cmを測る。口縁端部はやや外反し，受部は下方に引き出される。10は短頸壺で口径12cm胴部径14.2cmを測る。口縁部はほぼ直立し，肩部が張る。11は高坏の脚部で脚端部径は11.2cmを測る。脚は裾部で大きく外反し，端部



第31図 表土出土土器実測図 (縮尺1/4)



第32図 表土出土紡錘車・石器実測図（縮尺1/2）

は下方に引き出される。12は坏蓋で口径14.6cmを測る。天井部は回転ヘラ削りが施され、口縁は折りまげられて下方に引き出される。7は坏身で器高3cm口径14cm底径10.4cmを測る。体部は直線的に外傾し、底部はヘラ切りである。

14～16は土師器である。14は小皿で、器高1cm口径9cm底径7.4cmを測る。底部は糸切りされ、溝1で出土したものと同種のものである。15は甑の把手で、磨滅が著しい。16は口径18.5cmを測る甕で外面はタタキが施され、胴部内面はヘラ削りされる。

17～19は紡錘車である。17は滑石製で直径52mm厚み5mmの円盤状を呈す。18も滑石製で直径42mm厚み16mmの円錘状を呈す。19は土製で直径34mm厚み15mmを測り、モミの圧痕が認められる。

20は硬質砂岩製と思われる石剣の切っ先部であり、残存 64mm を測る。21は粘板岩製の扁平片刃石斧である。刃部長は 28mm を測る。22は硬質砂岩製と思われる石包丁である。紐孔部直下まで刃部を砥ぎ出してあり、かなり使い込んだものである。32は砂岩製の砥石である。上面および両側面を使用する。

ま と め

(1) 時期について

1号住居跡 出土遺物は弥生時代前葉から中葉までの遺物が出土しているが、住居跡が使用されなくなってもなく廃棄されたものと思われることから、弥生時代前葉の住居跡と考えられる。

貯蔵穴 かなり崩れているが、床面は焼ノ正遺跡(註1)でみられるような一段低くらのものと思われる。出土遺物は床面から弥生時代前期の土器と中期の土器がほぼ同一レベルから出土しているが、貯蔵穴が使用された時期としては、弥生時代前期後葉と考えられよう。

井戸 出土遺物のうち、複合口縁をもつ壺は井戸が使用されている時期に投げ込まれた(落ち込んだ)ものと推測され、弥生時代後期後葉に比定されよう。また壺の上位から出土した大甕は井戸が使用されなくなった後に投棄されたものであり、弥生時代後期末に比定されよう。

墓地 南北に延びる一群(1～3号木棺墓・2号甕棺墓)と東西に延びる一群(4～5号木棺墓・1号甕棺墓)に分けられ、5号木棺墓の周囲にも著しく残りが悪いため木棺墓または土壙墓と認めえなかった遺構がある。1号甕棺墓は弥生時代中期初頭、2号甕棺墓は同じく中期前葉に比定され、他の木棺墓も中期前半代、またはこれに近い時期のものと思われる。2・3号土壙の性格は明らかにしえないが、南北に延びる墓域の区割のために設けられたものとも考えられる。

2号住居跡 焼失した住居跡で、5世紀末から6世紀初頭のものと思われる。遺物は野黒坂遺跡34号住居跡(註2)向山遺跡3号住居跡(註3)と同様にカマドの右側に集中する。

(2) 筑紫氏との関係について

遺跡周辺のことについて、江戸時代に書かれた『筑前国 続風土記』(註4)筑紫神社の項に「……………筑紫氏則当社の神司にして、始は社のほとり居れり。筑紫村に宅址あり。……………」とあり、また、筑紫村の項に「……………村の東の方に小高き山あり、是を城の腰といふ。筑紫氏筑紫社司たりし時住せし宅の跡なり。」とあり、これを現地にあてはめると、現在は小字を廃止しているものの、調査地は「矢倉」でその東側の現在、筑紫小学校のある部分一帯が「城の越」という。また、明治12年に学校は同地に建設されていて、当時多量の遺物が出土したと聞いている。

以上のことと、当調査における歴史時代の遺構・遺物から見ると、白磁碗を出土した土壙が

1 基ある。この時期について大宰府分類（註5）より見れば、白磁劃花文碗（第27図－1）はV類4・b、白磁碗（第27図－2）はV類4・aの範中に入り、共に11世紀終りから12世紀の（註6）が与えられる。

これらのことを総合すれば、筑前国統風土記の中に見る筑紫氏が何時頃の人物であるかは不明であるものの、中世において磁器を有するものが、この地にいたことは事実である。が、それを筑紫氏の館跡とすることも推測の域を脱しえない。

註1 焼ノ正遺跡 立岩周辺遺跡発掘調査報告書第1集 1980 飯塚市教育委員会

註2 福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告第1集 1970 福岡県教育委員会

註3 九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告XII 1977 福岡県教育委員会

註4 貝原篤信 筑前国統風土記

註5 横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」九州歴史資料館研究論集4所収 1978

註6 九州歴史資料館森田勉氏ご教示

圖 版



(1) 遺跡の遠景 (北より)



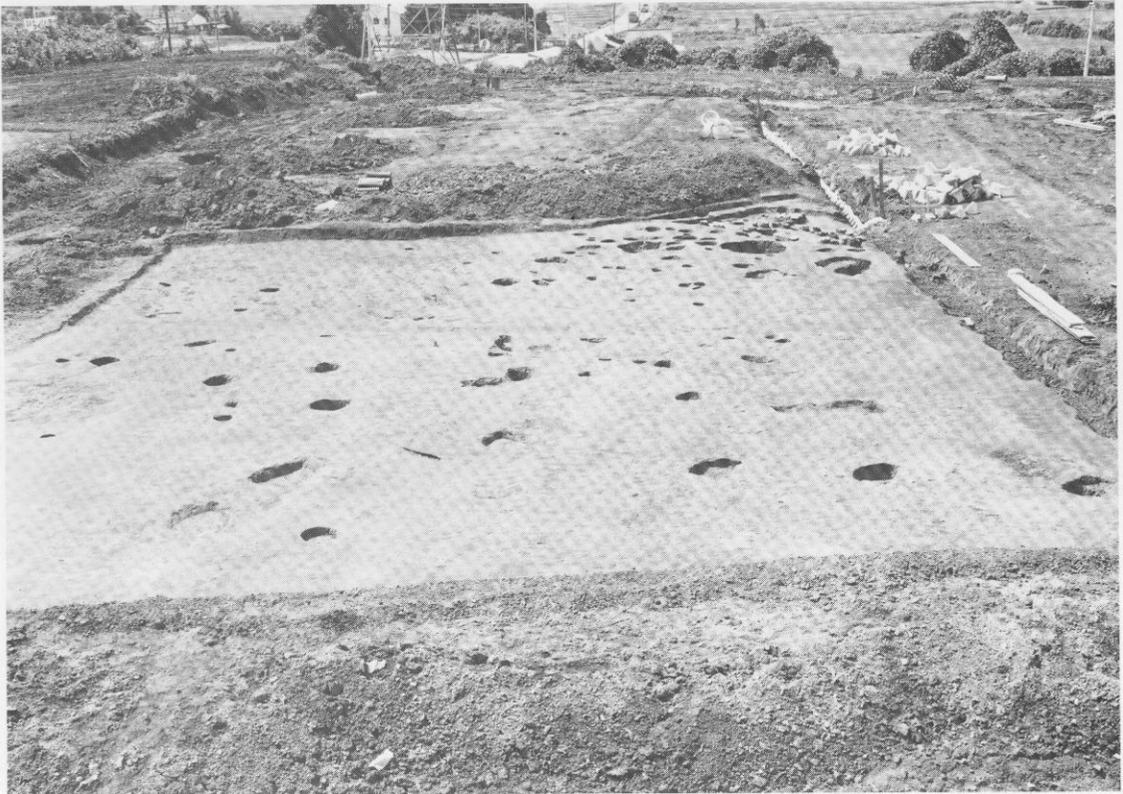
(2) 遺跡の近景 (北より)



(1) A地区全景(南より)



(2) B地区全景(東より)



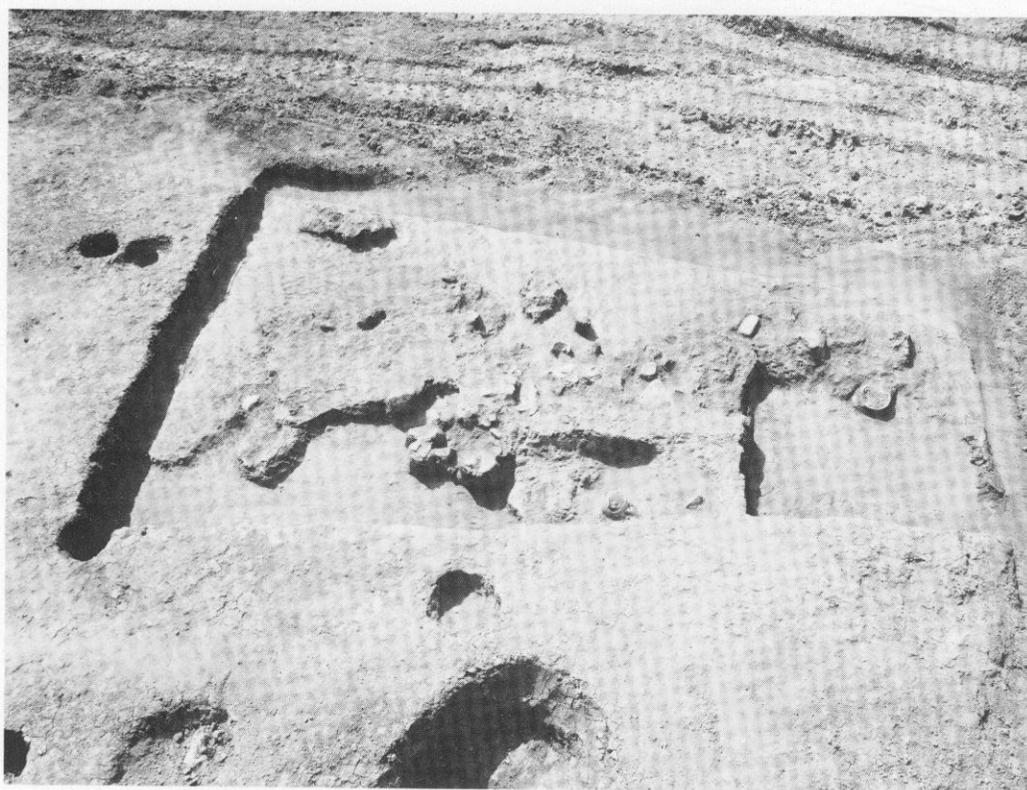
(1) C地区全景 (東より)



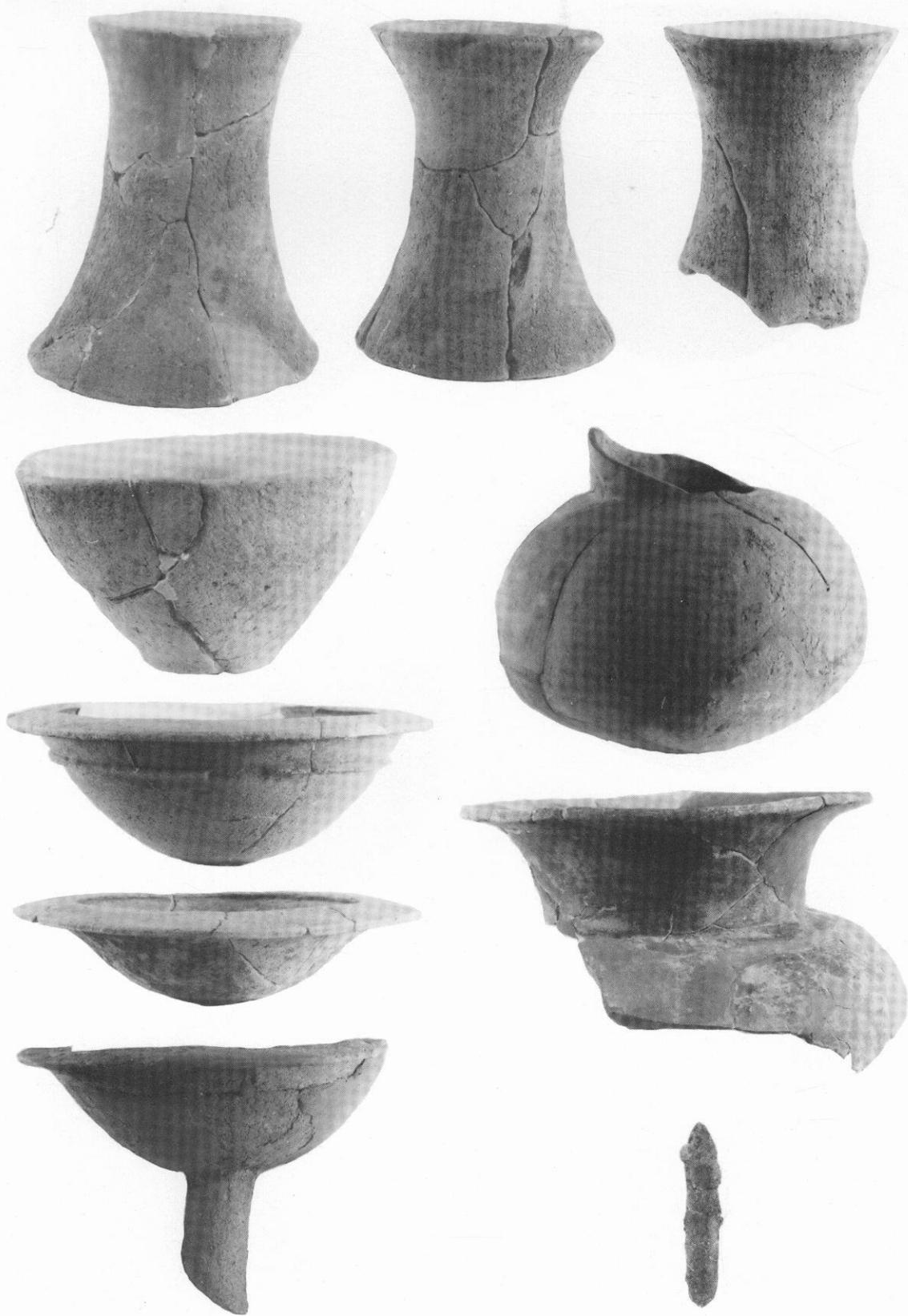
(2) 発掘調査風景 (南より)



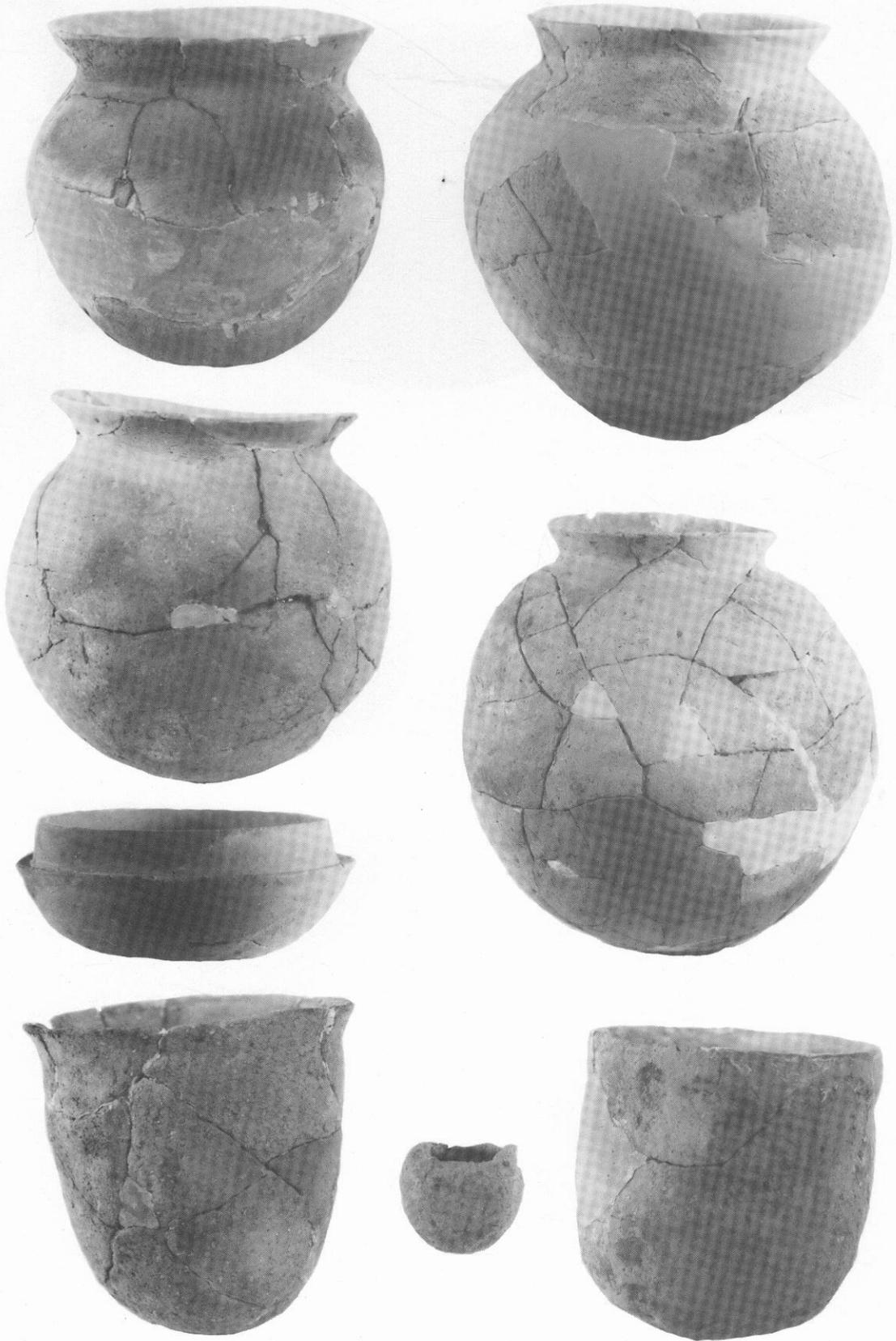
(1) 1号住居跡 (南より)



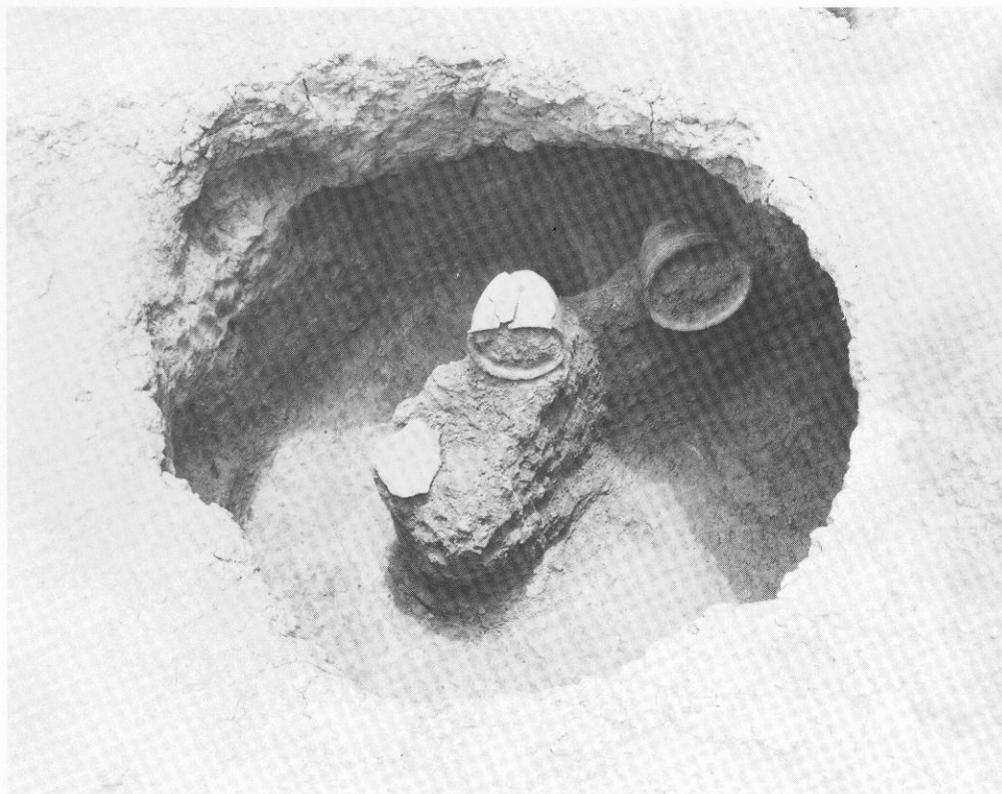
(2) 2号住居跡 (南東より)



1号住居跡出土遺物



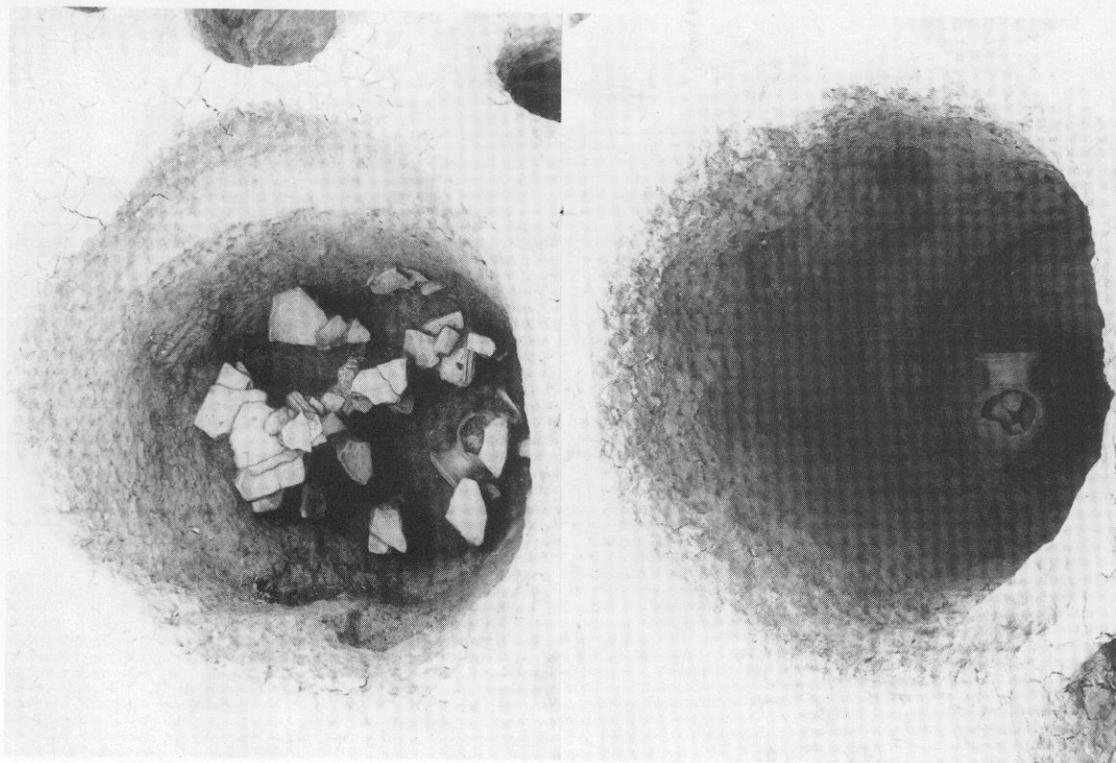
2号住居跡出土遺物



(1) 貯蔵穴 (北より)



(2) 貯蔵穴出土遺物



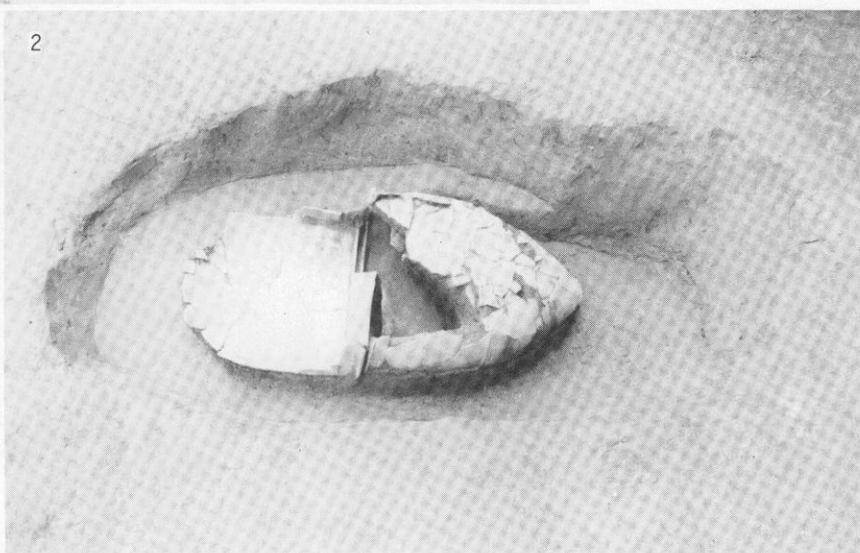
(1) 井戸



(2) 井戸出土遺物



1号甕棺墓

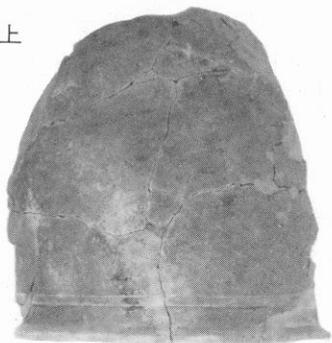


2号甕棺墓

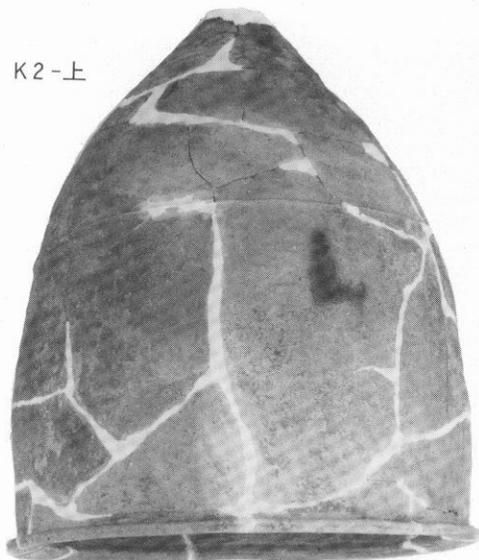


3号甕棺墓

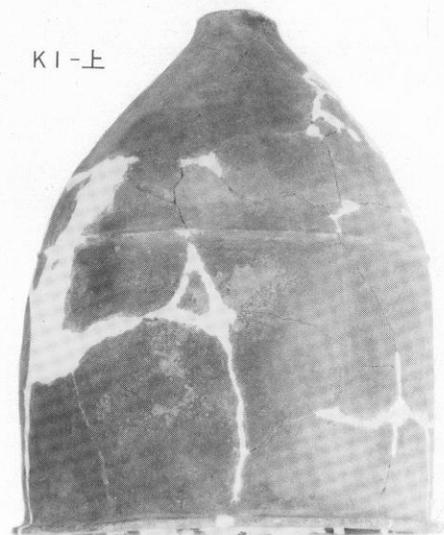
K3-上



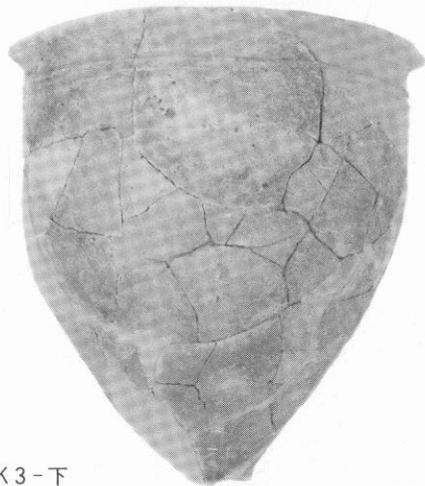
K2-上



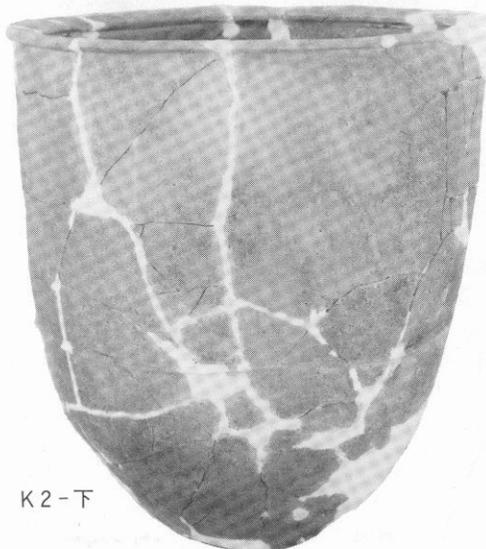
K1-上



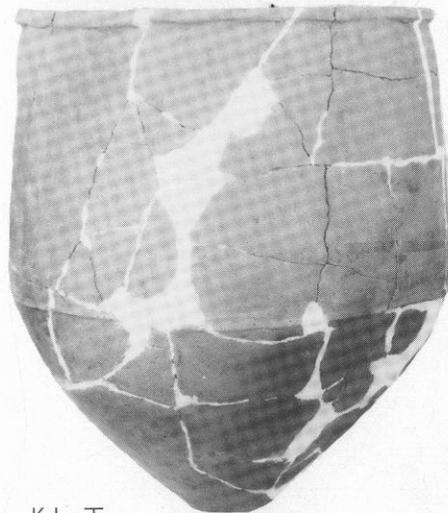
K3-下



K2-下

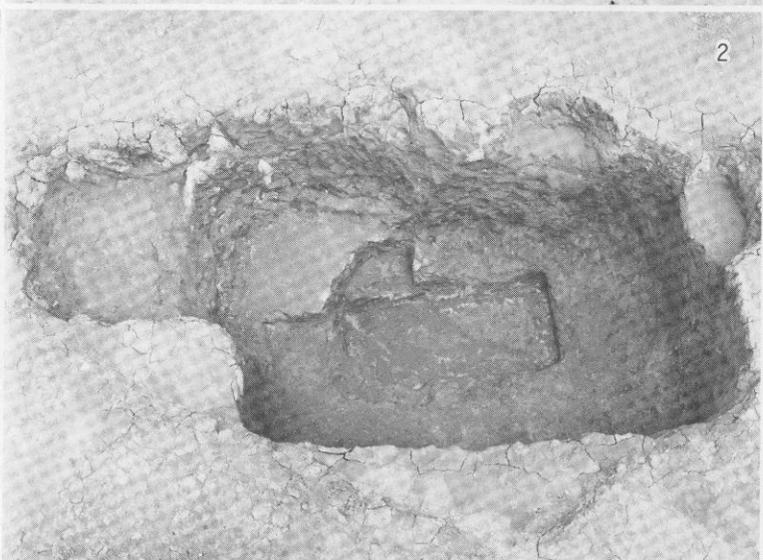
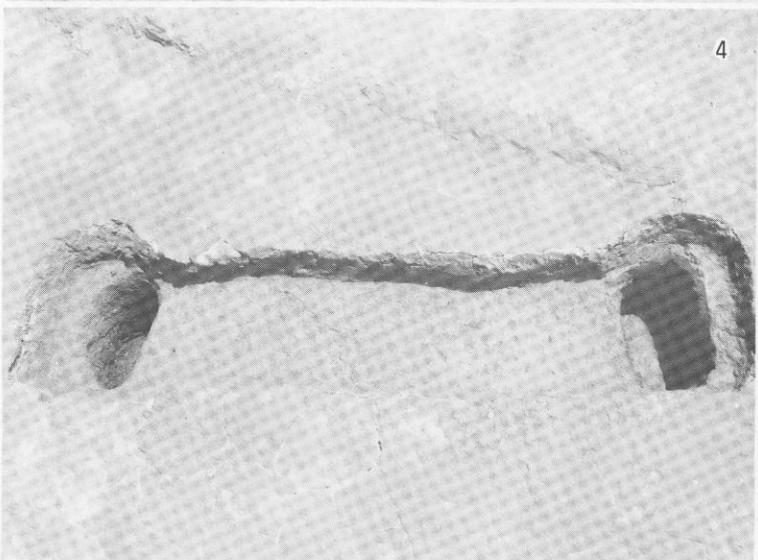
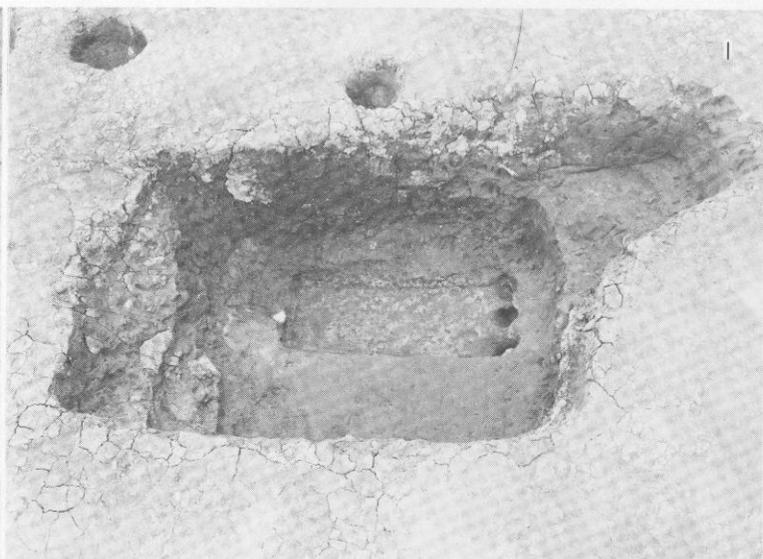


K1-下



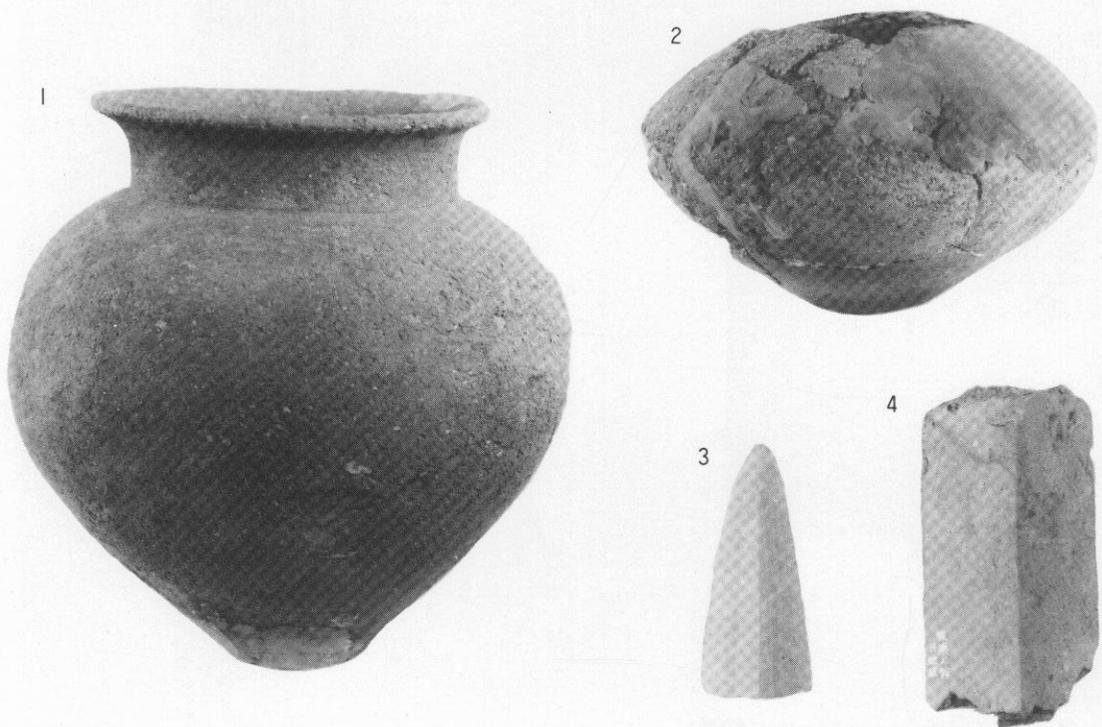
3、1号木棺墓

4、2号木棺墓

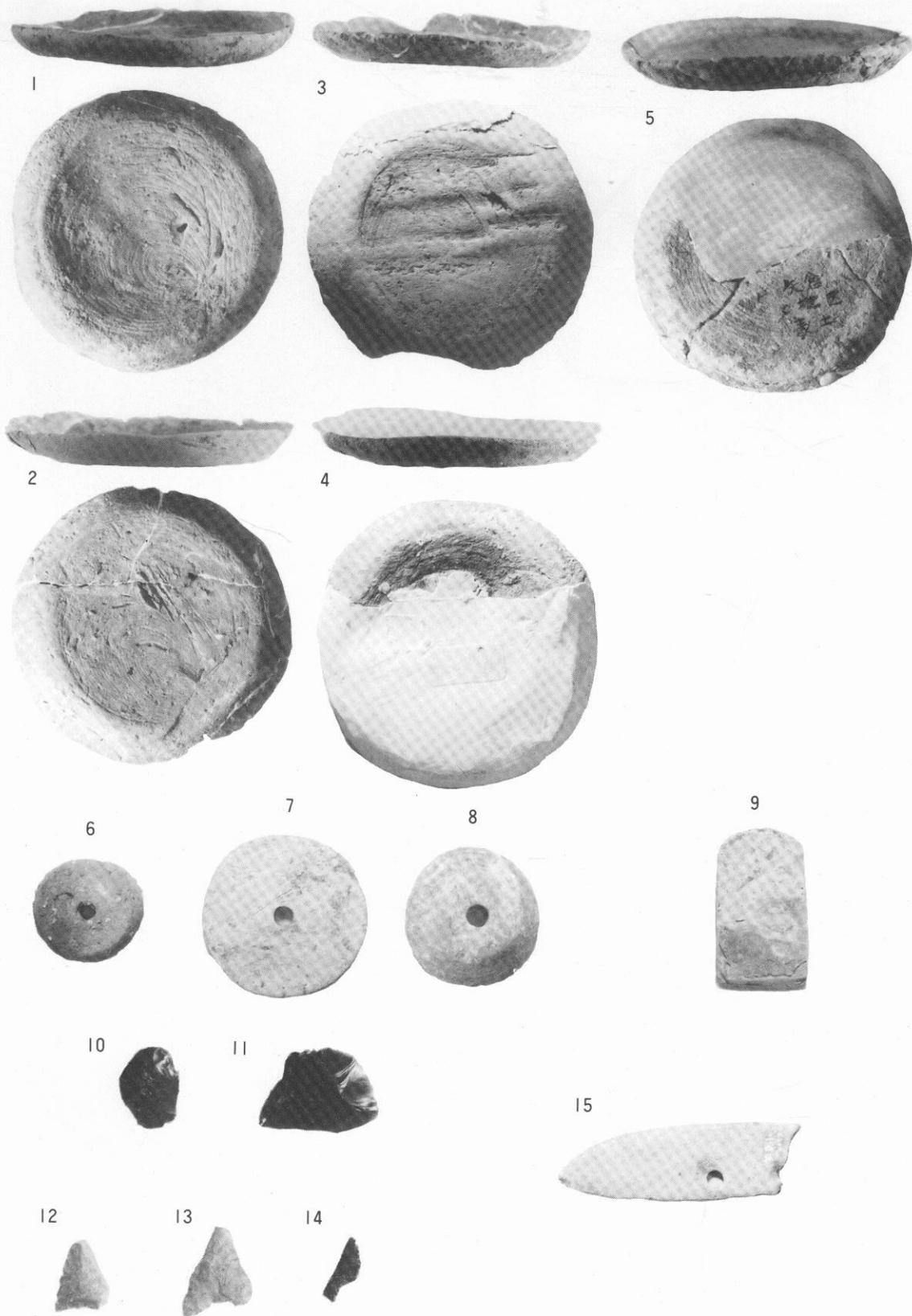




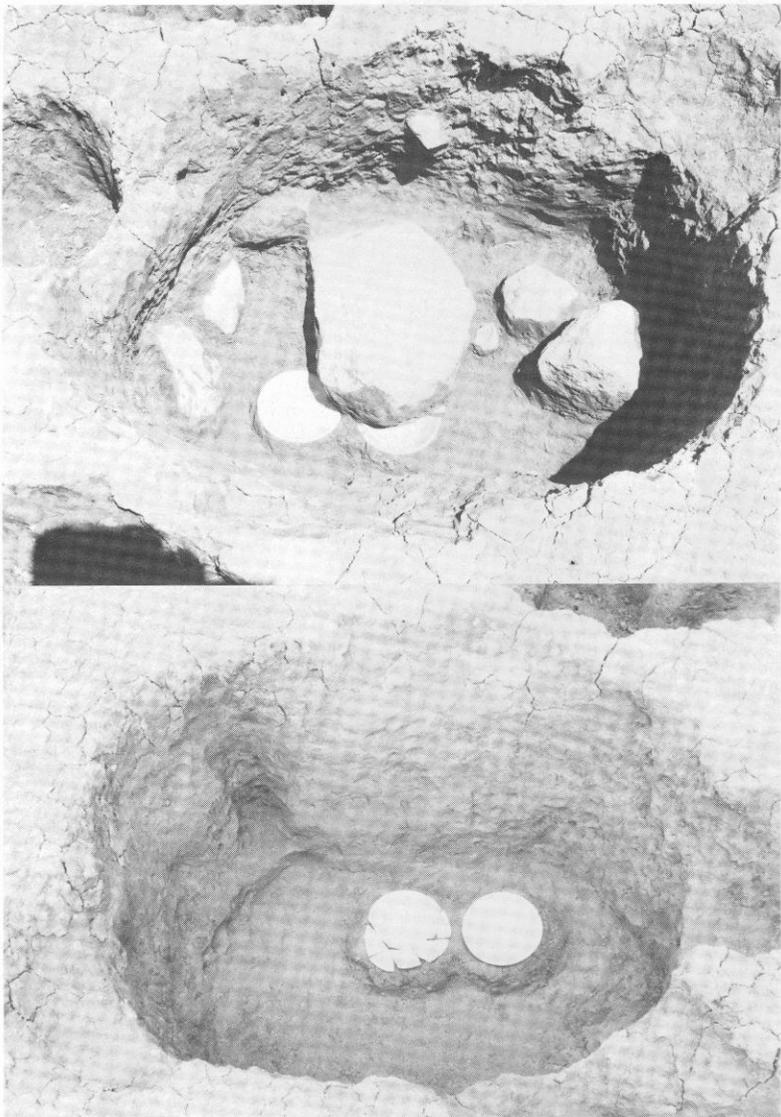
(1) 溝1 (左側)・溝2 (右側)



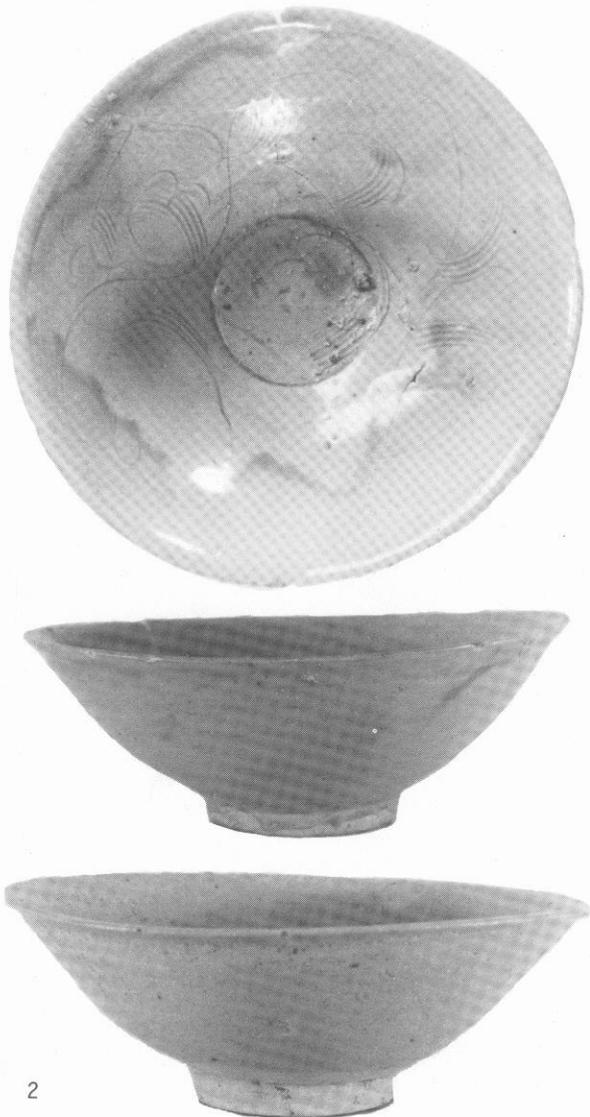
(2) 溝出土遺物 (溝1…4, 溝2…1・2, 3は表採品)



溝及び表採遺物（溝1…1～4，表採品…5～15）

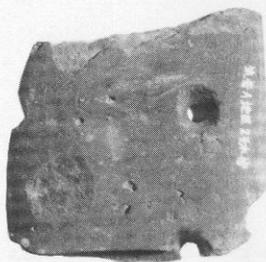
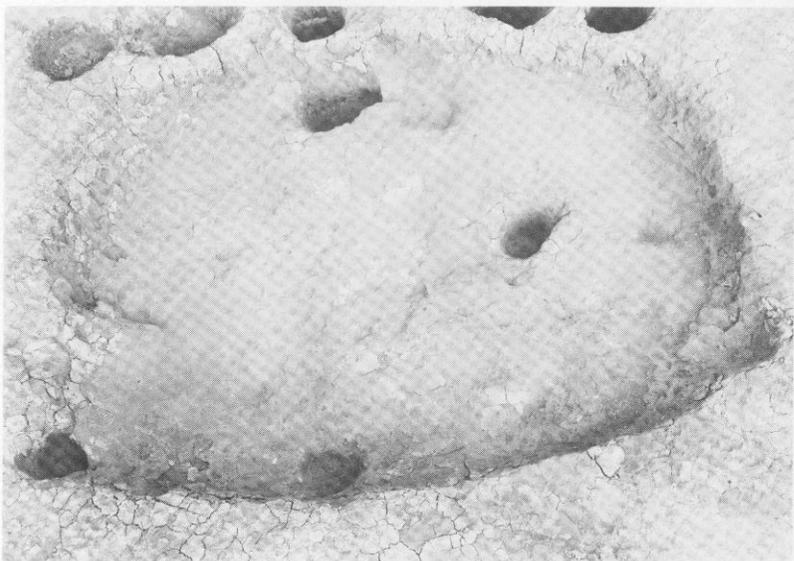


(1) 1号土坑



(2) 1号土坑出土遺物

2号土城及び2号木棺墓出土遺物



筑紫野市文化財調査報告書

第 8 集

昭和 57 年 3 月 31 日

発行 筑紫野市教育委員会
福岡県筑紫野市大字二日市753の1

印刷 正光印刷株式会社
福岡市中央区赤坂 1 丁目 2 の21